ポントスのヘラクレイデス断片89におけるピュタゴラスの輪廻思想

佐藤義尚

I 問題提起

魂の不死，輪廻転生をPythagorasが唱えたとは，衆目の一致するところである．事実，ほぼ同時代にPythagorasについての証言を残したXenophanes, Empedocles, Heraclitus, Ion, Herodotusは，いずれも直接に，あるいは間接にPythagorasの輪廻思想に言い及ぶ．この教えは，すでにPythagorasの生前から知れ渡っていたのである．しかし，その後，今日にいたるまでPythagorasは輪廻転生を「教説」としてのべ伝えたと，諸家は言う[1]．だが，Pythagorasの教説は，symbolaと称される言葉で，師Pythagorasにこれはと見込まれた弟子にのみ授けられ，部外者に語り広められず，「完全黙秘のうちに守秘される[2]」ことを旨としていた．守秘されるはずの教説が，万人に周知であったという点には，矛盾を感じざるを得ない．Pythagorasについての，同時代の証言，Xenophanes B 7によると，子犬をいじめている者にたいし，通りがかったPythagorasが「止めよ，ぶつな，それは友人の魂だからだ，鳴き声を聞いてわかった」と魂の輪廻を暗示する言葉をかける．輪廻転生が教説とすれば，その秘匿をPythagorasその人が，簡単に破ってしまっている．

symbolaは秘儀の流儀(μυστικῷ τρόπῳ[3])で，謎(aenigmata[4])として語られる，一行にも満たない片言隻句である．魂不死・輪廻転生の，説明的な記述は，symbolaのこの形式にそぐわない．それとも，輪廻説は，あるsymbolaについての解釈のおおよそを述べたものなのだろうか．しかし，それらしいsymbolaは見あたらない．あるいは，symbolaの謎めいた表現のゆえに，該当するsymbolaが眼前にあるにもかかわらず，我々が気づかないだけなのだろうか．もしそうならば，それほどの秘匿性にもかかわらず，そのsymbolaは誤って解釈されることなく，輪廻思想が正確に伝播したことになる．Herodotusは，ギリシアへの輪廻説の導入に言及して，実名は挙げないながらも，これを導入した人々は，「（魂不死，輪廻転生を）自分固有のものとして自分のものだと主張した」と記す[5]．この表現から見るかぎり，輪廻説は直截に語られて，黙秘の掟とは無関係であったことがわかる．Pythagorasが魂の不死・輪廻転生を語ったというのは，疑いえない事実である．しかし，これが「教説」として広められたという点には，疑問を抱かざるを得ない．そもそも輪廻思想は「教説」であったのか．

また，なぜ輪廻転生をPythagorasが唱えたのかという点についても，十分な考察は払われてこなかった．魂は，死後，冥界へおもむき，そこでは魂はまことに惨めで，わびしい存在でしかないと信じられていた[6]．これにたいしPythagorasは，冥界からの魂の再生，神々にだけ許されていた不死が，人間にも可能であるという福音を人々にのべ伝えたのだろうか[7]．しかし，Heraclidesによると人間の輪廻転生についての与件から，神々の享受する不死性は，注意深く取りのけられている(πλὴν ἀθανασίας. Heraclid. Pont. fr. 89)．神の属性としての不死は，依然として人間には許されていない．

Rohdeは，Pythagorasの輪廻思想が，倫理的な意味での民衆教化を目的にしていたと主張する．現世の運命は，前世の行いによって定まる．来世の幸福のために，Pythagorasが提唱する「Pythagoras的な生き方」に従わなければならないとする[8]．Cornfordはこれとはやや違ったニュアンスで，輪廻の過程において罪を贖い，輪廻の環から解脱すべきことをPythagorasが説いたとする[9]．しかし，Pythagorasの前世たるEuphorbusが，生前に行った行為の報償として，Pythagorasに生まれ変わったわけではない．民衆教化を，基本モチーフとみなすことはできない．また輪廻は解脱されるべきものではなく，後に述べるごとく，Pythagorasの尽きせぬ知の根拠として，積極的に評価されている．

Pythagorasは弟子と学派外の部外者，また弟子の中でも古参と新参とを厳格に区別した．Pythagorasは，教えを授ける相手が誰であるのかという点に，きわめて意識的だったのである．では，輪廻思想は，誰に，どのような場で語ったのか．この点について論じた者はいまだ誰もいない．Pythagorasは，単に輪廻転生が真理であるから，これを告げ知らせたにすぎないのだろうか．Pythagorasの輪廻説の提示について，具体的なイメージを我々は結ぶことができないままでいる．

Pythagorasは，魂の輪廻転生をどのような形で，いかなる意図で説いたのか．

II Heraclides fr. 89の成立と記憶のモチーフ

II 1 Heraclidesの転生譜の成立

Pythagorasの輪廻説を論じるにあたり，B. C. 4 CのHeraclides Ponticus fr. 89[10]を考察の出発点としよう．これが年代の点からかなり信頼でき，ある程度まとまった情報を伝える証言であるからだ．

Heraclid. fr. 89では，Pythagoras自らが，自分の魂の転生遍歴する有様を述べる．Pythagorasは前世でまずAethalidesだった．Aethalidesの父Hermesは，生きている間も，死んでいる間も記憶を保持する能力を，我が子に授ける．

Aethalidesの魂はIliasに登場するEuphorbusに転生する．このトロイの戦士はMenelausに討ち取られ，その楯はDidymaのApollon神殿に奉納される．Euphorbusの魂はHermotimusに転生する．Hermotimusは，神殿所蔵の数ある楯の中からEuphorbusの楯を選び，自分が前世でEuphorbusなりしを証明する．次に魂はDelos島の漁師Pyrrhusに転生し，最後にPythagorasに転生する．

転生の系譜で，起点となるAethalidesについての最古の証言は，Schol. Apoll. Rhod. I 645に引用されているPherecydesの証言である[11]．このPherecydesがPherecydes Syriusであれば[12]，年代的にはPythagorasよりも先に，Aethalidesの伝承が存在していたことになる[13]．Hermotimusについての，最古の証言は，Aristoteles, Metaphysicaである[14]．ClazomenaeのHermotimusの魂が，身体から遊離してさまよった，という伝承に影響を受けて，同郷のAnaxagorasがヌースと事物との区分を唱えた次第を，Aristotelesは伝える．これによると，Anaxagorasよりも先に，Pythagorasとほぼ同時代には，Hermotimusの伝承があったことになる．少なくともHermotimusについては，Pythagorasはその伝承を知っていた可能性はかなり高く，Pythagoras自らが転生の系譜をつくり，これがHeraclidesに伝わったと推測することも可能となる．

しかし，Pythagoras自身が前世として語ったのはEuphorbusのみで，Hermotimusその他への転生は，Heraclidesの創作になるというのが一般的な見解である[15]．PythagorasとEuphorbusとの結びつきは，Pythagoras自らに遡る．つまり，EuphorbusをPythagorasの前世としたのは，Pythagoras自身であった．もし後世の者が，Pythagorasの前世に誰かある人物を選定するとしたら，Hermotimusのごとくに，Pythagoras的な特性のある人物を選ぶにちがいない．Patroclusに傷を負わせるが，自らは殺されるという，およそPythagoras的ならぬ経歴のEuphorbusに，なんらかの意味でのPythagorasとの結びつきを発見できるのは，Pythagoras本人以外に想定しがたい．

Rohdeは，Heraclides fr. 89が，書かれた文章の引用ではなく，対話の場で話された言葉の伝聞であるから，断片の内容は不正確であるとし，Euphorbusの楯の伝承以外はHeraclidesの創作であるとみなす[16]．しかし，伝承過程における表現の変質と，内容の真偽とは別問題であろう．Burkertは，Aethalides, Hermotimusらにはそれぞれ独立した伝承があり，これらにはPythagorasについての話は含まれていないので，Heraclidesが初めてこれらを結びつけたのは明らかであるとする[17]．しかし，Euphorbusの伝承も，系譜の諸人物の伝承で最古であるものの，Pythagorasとの関係が文字に書き留められるのは，Heraclidesの断片が最初である．この点では，他の諸伝承と変わりない．転生譜の成立を考察するにさいし，注目すべきはこれらの論点ではなく，Euphorbusの楯を選ぶのが，

断片89ではPythagorasではなく，Hermotimusである点であろう．楯の選び取りの元来の形で，楯を選ぶのはPythagorasであるが[18]，これがHeraclidesではHermotimusに替えられている．PythagorasがEuphorbusの楯のエピソードを語るさい，あるときは自分が選び，あるときはHermotimusが選んだとは言えない．したがって，この変更は後世の者に拠っていることがわかる．このようにHermotimusが楯を選ぶという設定に変更されたのは，一連の転生の系譜が加えられたからである．もしこの系譜の中でPythagorasが楯を選ぶとすれば，これで証明できるのは，自分がEuphorbusであったことだけで，系譜に連なるその他の者たちでもあったことは証明できないからだ．

EuphorbusはAethalidesであったことを，PyrrhusはAethalides, Euphorbus, Hermotimusであったことを，Pythagorasはこれら皆であったことを記憶している．このように，Hermotimus以外は自分より先の前世をすべて記憶，確認しているのにたいし，Hermotimusだけ，自分の直前の前世でEuphorbusであったことのみを証明する．このことから，Pythagorasが楯を選ぶエピソードの前後に，他の前世に選定した人物をつけ加え，楯を選ぶのはHermotimusに変更する，という仕方でHeraclidesは系譜を作ったことがわかる．また，PyrrhusとPythagorasの前世記憶の箇所は（最後のPythagorasの記憶証明も，Heraclidesの付け加えである．元来Pythagorasが記憶していたのはEuphorbusであったことのみであるからだ），前世に誰であったかということの機械的な繰り返しになっている．これにたいし，Euphorbusの語りの後半は，断片89で他に言及のない動植物への転生，魂の冥界での知見というkatabasisを内容とする．この箇所は断片全体で異質であるゆえ，後で述べるごとく，Heraclitusが使った，元の伝承の痕跡である．元来は，Pythagorasがこれを物語り，Heraclidesが系譜をつくるさい，Euphorbusの語りに割り振ったものと推測できる．

このHeraclitusの転生譜をもとに，以後，以下のごとき転生譜が作られていった．

転生譜

Heraclid. fr.89 W.; Hippol. Haer. I 2, 11 = Diels, Doxographi Graeci, 557

Αἰθαλίδης Εὔφορβος Ἑρμότιμος Πύρρος Πυθαγόρας

Dicaearchus fr.36 Wehrli = Clearchus fr.10 Wehrli = Gellius N. A. IV 11, 14

Euphorbus Pyrandrus Aethalides Alco Pythagoras

Hieron. In Ruf. 3. 40

Euphorbus Callicles Hermotimus Pyrrhus Pythagoras

Schol. S. El. 62 = Suda s. v. ἤδη

Αἰθαλίδης Εὔφορβος Ἑρμότιμος Πύθιος Πυθαγόρας

Schol. A. R. I 645 (1)

Αἰθαλίδης Εὔφορβος Πύρρος Ἠλεῖός τις Πυθαγόρας

Schol. A. R. I 645 (2)

Αἰθαλίδης Εὔφορβος Ἑρμοῦ υἱὸς καὶ Σαμίας Πυθαγόρας

Tert. De An. 28

Aethalides Euphorbus Pyrrhus Hermotimus Pythagoras

Porphyr. vit. Pyth. 45

Εὔφορβος Αἰθαλίδης Ἑρμότιμος Πύρρος Πυθαγόρας

II 2 記憶のモチーフ

では，どのようにAethalidesらの伝承を，転生の系譜にHeraclidesは組み込んでいったのだろうか．最初に各人物の伝承を確認し，次にHeraclidesが転生譜でこれを，いかに変容したのかを調べることにする．

Aethalides

AethalidesはHermesの息子．Argo船の冒険に参加した．父親Hermesの息子への慈愛のゆえに，記憶がかれに恵まれた．この記憶力を見込まれてArgo船の伝令になる．Pherecydesによる異伝では，HermesはAethalidesに，あるときは冥界に，あるときは地上に魂が逗留するという贈り物を授けた．これらの伝承を伝えるのは，Apollonius Rhodiusへの古註である[19]．これは二つの転生譜をも伝える．

Schol. Apoll. Rhod. I 645 s. v. ἐπιδέδρομε λήθη[20]

「『忘却が（魂に）取りついてしまう』死者は，生前わが身に起こったことどもを忘れてしまうと言われているからだ．それで作者(Apollonius)がここで言っているのは，かれ(Aethalides)は，死んでしまっても忘却の河に落ちず，哲学者たちの言葉にあるように，輪廻転生し，ヘルメスの意によって，自分が誰であったかを知っていたということなのだ．ペレキュデスの述べるところでは，アイタリデスはヘルメスから，自分の魂があるときは冥界に，あるときは地上に居ることができる，という贈り物を授かっていたのである．他方，ピュタゴラス派の述べるところでは，このアイタリデスは，魂が不壊であるので，トロイ戦争の最中には転生して，パントオスの子エウポルボスであった．つぎにこの者からクレタ島のピュッロス，つぎに名前未詳の誰かあるエレア人，これらの転生の後で，ピュタゴラスその人になったのである．ピュタゴラスは，魂が所を

替えて他の身体に転生するゆえに，かく語る，自分は最初はアイタリデス，次にトロイ人エウポルボス，次にヘルメスと娼婦サミアとの息子，そして今，ピュタゴラスである．この記憶が，ヘルメスの，息子アイタリデスにたいする祝福ゆえに，自分に備わっているのだと．」

ここで引用されている，SyrusあるいはAthenaeのPherecydesが述べる，HermesからAethalidesへの贈り物の贈与(Pherecydes 7 B 8 D.-K.)が，Heraclidesの断片における，Aethalidesへの贈り物の典拠となっている．ただし断片では，Hermesから息子Aethalidesに授けられるものが，「生きているときも，死んでいるときも出来事の記憶を保持できる」能力に替えられている．古註後半の転生の系譜は，註釈者がHeraclidesを参考につくったものである．Heraclides断片での記憶という贈り物の授与は，古註では，最末尾の一文に形を変えている．Aethalidesが記憶力ゆえに伝令に選ばれたという，Apoll. Rhod. の記述も，Heraclidesに拠っている[21].

古註のPherecydesによると，Hermesが贈ったのは地上と冥界間の往還である．この幽明の境を魂の連続性を失うことなく，またぎ越すという特性ゆえに，Heraclidesは，Pythagorasの前世としてAethalidesを選定したのだった．しかし，これを系譜に組み入れるにあたっては，この特性を無視する．もしHeraclidesの断片が魂の不死・転生の説明を目的としていたら，Pherecydesの話を，そのままこれの縁起譚として活用してしかるべきだろう．しかし，断片では贈り物の内容が前世の記憶保持に替えられている．このすり替えから，断片では，輪廻そのものではなく，記憶が主題になっていることがわかる．断片でのAethalidesの要求，死んでいるときの記憶保持とは，魂が死後も存続し，再生したときにその記憶を失わないことを意味する．これは魂不死・輪廻を前提としたうえでの要求である．

Euphorbus

トロイ戦争のトロイエ人の武将．PanthousとPhrontisの子 (Il. XVII 40). Patroclusに最初の傷を負わせる (Il. XVI 806-815). 自分自身はMenelausによって討ち取られ，武具をはぎ取られる (Il. XVII 1-60). ArgosのHera神殿にはMenelausがEuphorbusから剥いだ武具が奉納されていた (Paus. II 17, 3). Pythagorasがこの楯を選び取り，自分とEuphorbusの魂の同一性を証明した逸話は多くの作者に引用されている[22].

さらに，EuphorbusはThalesに先んずる幾何学者とも言われている[23]．この幾何学者Euphorbusを伝えるのはCallimachusである．Thyrionなる人物が「最高の

賢者」に杯を贈るべく旅に出る[24]. Didymaで目的のThalesが地面に図形を描いているのを見つける.

Callim. fr. 191. 58-62 Pfeiffer
「アルカディア人（テュリオン）は幸運にも見つけた,
ディデュマでその老人（タレス）が大ういきょうで
地面をなぞり，図形を描いているのを.
その図形はプリュギア人エウポルボスが発見したもの，この人物こそが
ひとのうちで最初に三角形と多辺形と
（惑星の）螺旋状の回転軌道円[25]を描き，かつ生き物を
禁忌せよと教えたのだ.」

ここではEuphorbus，つまりPythagorasの前身が，やはりPythagorasと同じく，幾何学・天文学を研究し，生類の禁忌を説いている. Diogenes Laertiusは，Callimachusのこの箇所を引用して，Euphorbusが創出した理論を，Pythagorasが発展させたと記す (D. L. I 25). これはEuphorbusが理論を創始し，生まれ変わりのPythagorasはこれを記憶しつつ，さらに発展させたと解釈できよう.

Heraclidesの断片では，HermotimusによるEuphorbusの楯選び取りの箇所を除くと，Euphorbusは，以上の伝承とは無関係に，専ら前世の記憶を述べる. ここでも前世の記憶という，断片の新しい文脈のなかに，Euphorbusは取り込まれている.

Hermotimus

HermotimusはKlazomenai出身の修験者. その魂は長期間身体を離れ，遠く離れた場所をさすらうことができた. 魂が戻ってくると，普通では経験できないことを報告した. 魂のそのようなさすらいの間に，残された身体は，妻に裏切られ，敵の手中に帰し，亡骸として焼かれてしまった. 市民らは殺されたHermotimusのために，聖所を浄めた[26].

諸伝承に伝えられるHermotimusの第一の特性は，Aristotelesの言及からわかるように，魂の身体からの遊離である. しかし，系譜に組み込まれるにあたっては，この特性は無視され，Euphorbusの楯を記憶していることによって，前世を証明するというかたちで，系譜に組み入れられている.

Pyrrhus

PyrrhusはDelos島あるいはCreta島の漁師で，Pythagorasの前世としてのみ伝

承される[27]. Dicaearchusの転生譜のPyrandrusは，おそらくPyrrhusと同じ．Delos島のなんらかの儀礼が背景にあると思われる[28]．諸転生譜で，他の名前に置き換えられることもあるので，それほどの重要性はない．転生譜で最も重要なのはPythagorasである．Pythagorasへの転生というクライマックスを際立たせるために，その直前には，あえて重要ではない人物をHeraclidesは選んだと考えられる．

同一の魂が転生していく．したがって，まずなんらかの意味で，Pythagoras的な特性を備えた者を，Heraclidesは選定する．従来の伝承を系譜に取り込むにさいしては，伝承でのモチーフは消し，前世の記憶のモチーフに変える．このようにして，Heraclidesは，転生の系譜の一人一人が前世を述べて，記憶の贈り物を授かったことを証明する，という構成にした．Aethalidesは生前にはすべての出来事を記憶しつづけ(διαμνημονεῦσαι)，死後も生前と同じ記憶を保持していた(τηρῆσαι　μνήμην)．Euphorbusは自分がAethalidesであったこと，Hermesから贈り物を授かったことなどを語り，前世を記憶していることを証明する．Hermotimusはアポロンの神殿に奉納されている何枚もの楯の中から，Euphorbusの楯を選び取り，前世がEuphorbusであったことを証明する．Pyrrhusは，いかにAethalidesから，今の自分に至るまで転生してきたかを記憶している(μνημονεύειν)．Pythagorasは以上で話されたことすべてを記憶している(μεμνῆσθαι)．ここでは輪廻転生のモチーフは，一つ一つの記憶証明のエピソードをつないでいく役割を果たしているにすぎない．Heraclidesは，Euphorbusの楯のエピソードに，記憶による前世の証明というモチーフを読みとって，これを忠実に写しつつ，系譜を作り上げたのである．

以上のごとき，Heraclidesの創作部分を払いのけると，Pythagorasの唱えた輪廻説が，元のかたちで現れる．Pythagorasは，輪廻転生そのものを唱えたのではなく，これを前提としてEuphorbusの楯のエピソードを語ることで，前世を記憶していることを証明したのである．

II 3 Empedocles B 129, 記憶の意味

輪廻転生の記憶には，いかなる意味があるのだろうか．これについては，つとに指摘されているとおり[29]，Pythagorasの超凡な記憶力への，Empedoclesの言及が，示唆を与えてくれる．Empedocles B 129[30]では，名指しされていない「ある人物」が，尊敬の念深く讃仰されている．「ある人物」が誰であるのかについては，断片を引用する古代の三つの証言すべてが，Pythagorasの名を挙げる．TimaeusのみParmenidesの可能性を示唆するが，そのTimaeusもPythagorasを支

持している[31]．断片の後半三行は，比類ない記憶の能力を述べるが，これはPythagorasの伝承にはあるが，Parmenidesについて語られることはない能力である[32]．この断片の「尋常ならざる量のことどもを知る」「莫大な富を所有した」という表現は，HeraclitusがPythagorasにたいし批判した，知性を欠いた「博識」と通じる(Heraclit. 22 B 40, 129)．「かしこき業」とは，Empedoclesのテクストによれば，予言，病気の癒し，作曲，暴風の鎮めといった天候の制御，黄泉からの死者の連れ戻しを言う[33]．これらはAristotelesによって記録された，Pythagorasの一連の奇蹟譚[34]に通じるものである．また，実名が伏せられていること自体が，Pythagorasを指示している．畏敬の念からPythagoras派は，師を実名で呼ぶのをはばかったからである[35]．これらからこの断片の「ある人物」は，Pythagorasを指すと考えていいだろう[36]．

この断片は，通常，輪廻して過去二十世代に及ぶ，Pythagorasの記憶に言及していると解釈されている．これにたいし，Wrightは最後の行を，輪廻転生した過去の世代ではなく，未来の世代に言及していると解釈する．知恵の富が前半の三行で強調され，後半三行ではこの知恵が修得されたさいの，知恵の広大な適用範囲が述べられている．最後の「十，いや二十世代」は過去ではなく，未来の世代を指し，予言者としての知恵の及ぶ，時間的な範囲を示しているとし，Zhmudもこれを支持する[37]．しかし，前半と後半を結びつけているのはγάρであり，後半三行が前半の三行を理由づけている．Wrightの解釈では，因果関係が逆になる．Pythagorasが自分の知を述べるとき，その視点は，自分の前世，前世における出来事，友人の魂の転生[38]のように，もっぱら過去に向いている．未来に視点が向かう場合は，入港した船が遺体を載せていることの予言，Pythagoras派への反乱の予言[39]のように，特別な出来事の予見に限られている．このような状況証拠から，Pythagorasの知の適用範囲が，未来のこと一般であるという見解を採ることはできない．

通常の解釈どおり[40]，二十世代にわたる前世の記憶を述べていると解釈してよいだろう．富とは輪廻の過程で，記憶を保持することで，心に蓄えられた知である．すでにこれが心の中にあるゆえに，これをやすやすと見ることができる．過去に蓄えられた知と，それによるかしこき業を，この断片は語っているのである．Wrightの言うがごとき未来の知見は，この過去の膨大な知見の中に含まれる．もっともよく過去を知る者が，もっともよく未来を洞察できるからだ．

転生における記憶の保持が，Pythagorasの功力の根拠になっていることを，Empedoclesの断片から確認できる．輪廻転生での記憶をすべて保持しているがゆえに，全世界の知識に通達することになり，これによってPythagorasは，

シャーマンとしての能力を発揮することができたのである.

II 4 Xenophanes B 7, 動植物への転生

Pythagorasについての最古の証言は, Xenophanesの断片である[41]. Diogenes LaertiusはPythagorasについての証言として引用しているが, 断片自体には, Pythagorasの名前は記されていない. 最初の言葉, καί ποτέ「さらにあるときには」は, 先に類似の逸話があったことを示す[42]. 主語は魂の輪廻といった問題でよく知られた人物であって, 無名のOrpheus教徒ではない. Diogenes Laertiusが引用しているがごとくに, Pythagorasを主語の人物としてよいだろう.

Xenophanesのこの断片, ならびにHeraclides fr. 89, 動物の生け贄の禁止[43], 豆の禁忌[44]から, 魂が動植物へ転生するとPythagorasが考えていたのは, 確実である. Xenophanesの断片は, 魂が人間のみならず, 動物にも転生するという点を, スキャンダルとして非難する調子がこもっているが, Heraclidesの断片にはそのような非難は感じられず, 前世で自分がAethalidesらであったことと, 動植物への転生は同列に置かれている. Empedoclesは, 前世で得た知見の堆積が, Pythagorasのシャーマンとしての業の根拠と解していた. 動植物への転生も, 同じ観点から解釈すべきである. つまり, 動植物に宿ったがゆえに, それらの世界を知り尽くすことができた. それゆえ, 動物の言葉を話すことができ, 猛獣を意のままに操ることができ, 自然を操ることができた. 事実, Pythagorasの奇蹟譚では「人喰い蛇をかの人は捕らえて放生した」「白鷺を撫でても, 猛禽は凝然不動であった」[45]といった動物にかかわるものが, 大きな比重を占めている. 動植物についての奇蹟を根拠づけるために, Pythagorasは動植物への輪廻も転生の系譜に織り込んだと私は考える.

III Heraclides fr. 89 の証明のモチーフ

III 1 Euphorbus

PythagorasはEuphorbusを自分の前世とし, これを核に転生の系譜がつくられた. Pythagorasの転生譜に列せられる人物には異同があるが, Euphorbusが落とされることはない. Pythagorasの前世に言及する場合, Euphorbusだけを引き合いに出す場合も多い[46]. Heraclidesの系譜でも, Euphorbusに関する叙述がもっとも詳しく, 被伝達文の対格不定法の構文中, Euphorbusの語りだけが直接話法になり, 特別の地位を与えられている. このような転生の系譜におけるEuphorbusの優位は, いかなる理由によるのか. Pythagorasは, 可能性としてはAethalidesの伝承を, ほぼ確実にはHermotimusの伝承を知っていた. なぜ

Pythagorasは，これらではなくEuphorbusを自分の前世として選んだのか．Euphorbusにあって，Aethalides，Hermotimusにないものがあれば，それがこの問への答になるだろう．

Euphorbusにまつわる，上述の諸伝承のなかで，Callimachusの伝える幾何学者Euphorbusというイメージは異色であった．この点に注目して，Euphorbusが幾何学上の真理の啓示者であったから，Pythagorasの前世の主要人物になったとみる研究者もいる[47]．しかし，この見解を採ることはできない．Callimachus fr.191，61-62はEuphorbusが殺生戒を教えたとうたう．これはトロイ軍の戦士が唱えるべき内容ではない．61行目はテクストが確定していないが，BurkertはDielsのἕλικαを採り，惑星の螺旋状の軌道と解釈する[48]．このように読めば，60-62は幾何学，天文学，殺生戒に言及し，Pythagorasの教えの全体を通覧することになる．この読み方を採用するか否かはともかく，この箇所が幾何学から不殺生に至る，Pythagorasの多面的な教えを，簡潔に述べていることは確実である[49]．これらの諸項目を付与されるEuphorbusは，もはやPythagorasの前世ではなく，Pythagorasそのものになってしまう．Callimachusのこの箇所がEuphorbusに固有の伝承であったのではなく，逆にPythagorasの諸特性が，Euphorbusに投影されているとしか考えられない．

Callimachusの断片を，正しく解釈しているのはBurkertである．Pythagorasがエジプトからギリシアに幾何学を招来し，完璧に仕上げたとされる．しかし，Pythagoras以前に，Thalesがすでに幾何学者として有名であった．Callimachusは機知を働かせ，Thales以前に，Pythagorasの前世のEuphorbusが諸定理を発見していたということにして，この時間関係の矛盾を回避したのだった[50]．Euphorbusが幾何学者であったからPythagorasの前身に選定されたのではなく，後世につくられたPythagorasの幾何学者としてのイメージが，Euphorbusに投影されたのである．

学問的な歴史記述以前には，ギリシア人の歴史意識は，直前の過去と，Homerusの時代という二つに分かれていた．この歴史観からして，Pythagorasが前世について語るとき，時代をHomerus時代に設定したのは理解できるとしても，なぜIliasでさして重要でもないEuphorbusを選んだのかという疑問は残る．BurkertはKerényiの解釈を採って，Patroclusが死に際に，おのれを最後に仕留めたHectorに言う言葉「わたしを討ち取ったのは，死のモイラとレトの子（アポッロン）．人間のうちではエウポルボス．お前は三番手にすぎぬ」(Il. XVI 849-850)に注目する．ここではHectorが三番手と言われているので，Moira，Apollon，Euphorbus三者のうち，いずれかの二者が重なっていることになる．Moiraは人皆に同等に訪れるゆえにこれを除外し(Scholia Il. XVI 850)，Apollon

とEuphorbusが同定されることになる．つまりHomerusの用語法では，EuphorbusとはApollonというのに等しい．PythagorasはApollonの化生と目されるので[51]，EuphorbusがPythagorasの前世として選定された，とBurkertは解釈する[52]．しかし，神と人間とが「同じである」(identisch)とは，いかなる状態を言うのであろうか．両者の間には越えがたい隔たりが介在するのであり，Euphorbus即Apollonという解釈には無理がある．両者の間に関連を認めるにしても，EuphorbusはApollonに操られる道具という解釈にとどめるのが穏当である[53]．しかし，この解釈にしても，EuphorbusとPythagorasとが結びつく契機は説明できても，Pythagorasの前世における，かれの特別な位置は説明しない．Apollonの操り人形という性格は，Aethalidesの記憶力，Hermotimusの脱魂遊離とくらべても，あえてEuphorbusを前世に選ばせる理由として決定的に優れていないどころか，むしろ劣るものであろう．

Euphorbusが他の人物に比べて特異であるのは，Euphorbusが楯とHomerusの一節(Il. XVII 51-60)という，二つの具体的な痕跡をこの世に残している点にある[54]．楯の他に前世の証明となるのが，Homerusの一節である．IliasでEuphorbusが登場する場面を，Pythagorasは，おのれがEuphorbusなりしを証明するために，再三吟じたという[55]．しかもその一節がうたうのは，Euphorbusの死である．輪廻転生の節目が主題になっているのであり，この点でもその一節は，輪廻思想を述べるのにふさわしいものになっている．このHomerusの一節と楯の二つを手がかりに，前世がEuphorbusであったことをPythagorasは証明できる．この証明可能という点が，Euphorbusを特別な地位に置いた理由であると私は見る．「莫大な富」「あるものすべてのひとつひとつを見て取った」(Emp. B 129)．「どれほどの(ὅσα)植物，動物に転生したのか」(Heraclides, fr. 89)であって「どのような」(ὁποῖα)ではない．このような表現からわかるように，Pythagorasの記憶は量的な莫大を特徴とする．おそらく前世の記憶を次々に繰り出して，聴衆を圧倒したものと思われる．この記憶内容の中に，その真であることを検証できるものがあれば，それがとりわけ語る対象に取り上げられただろう．このようにして，EuphorbusはPythagorasの記憶証明において特別な位置を占めることになった．

III 2 記憶と証明

Pythagorasの前世確認は，自分の権能の源泉たる記憶の証明であったことが確認できた．この記憶と証明というモチーフが，Pythagorasの伝承ではいかなる文脈のなかに位置づけられているかを，ここで確認しておく．

Aristoteles fr. 191では，一連の奇蹟譚の一つとして，前世の想起が挙げられ

ている．二カ所に同日同時刻に出現したこと，大腿部が黄金であったこと，鷲を撫でても鷲は不動であったこと，渡河するさい河神が挨拶したこと，これらの奇跡譚に混じって，様々な奇蹟と同一水準で，PythagorasがMylliasに，前世でMidasであったことを想起させたという話が挙げられている．これらの奇蹟を行う目的は，Pythagorasが「人間の性質以上のよりすぐれた(κρειττόνων)種から生まれたことをしめす[56]」ためであった．Iamblichusの一節では，一連の奇跡譚の終わりで，これらのことを語る目的が証明にある(πρὸς πίστιν)ことが確認されている[57]．証明する内容は，自分がApollonであることのように，自分が人間よりもすぐれた(κρείττονος)存在である[58]ということである．また，奇蹟を示す相手は，選抜された弟子ではなく，一般の「大勢の人々」である[59]．このような証言から，Pythagorasの行った奇蹟とは，超人間的な，自己の能力を証明するために，大勢の一般人の前で行われるパフォーマンスと定義できよう．

Pythagorasの前世の記憶証明は，この定義に当てはまる．転生における記憶保持が，シャーマンとしての功力の根拠になっていた．Heraclides fr. 89においてもその目的は，記憶保持の証明 (πίστιν δοῦναι) にあった．PythagorasがEuphorbusに着目したのも，証明可能という点にあった．これの聴衆として想定されるのは，一般の人々である．Hermotimusは，自分がEuphorbusなりしを疑う人々を前に，神殿に奉納されている楯の中から一枚を，Euphorbusのものとして指し示す．人々が固唾を呑むなか，楯を逆さにすると，そこにはEuphorbusの名が刻まれていた．このようにDelatteは，Diodorusの記述をもとに，Heraclides fr. 89でのHermotimusによる楯の選び取りを，再現してみせる[60]．

Pythagorasは，記憶の証明を奇蹟として一般多数の前で行うことで，信仰を集めた．人々の信仰が，自分の功力をさらに押し上げるというメカニズムを知っていたがゆえに，Pythagorasはこの奇蹟を繰り返し[61]，積極的に行った．Pythagorasはshamanであると同時に，才知に富んだshowman[62]でもあったのである．Pythagorasが短期間のうちにCrotonで政治的な勢力を得たことと，このshowmanとしての性格とは，無関係ではなかっただろう．

IV 輪廻思想の導入

IV 1 PythagorasかOrpheusか

Pythagorasの前世の証明という奇蹟では，輪廻思想はすでに前提となっていた．では，Pythagoras以前に，ギリシア世界で輪廻思想を唱えた人物がいたのだろうか．輪廻思想を導入した候補としては，第一にOrpheus教が考えられる．これがPythagorasに先んじており，これからPythagorasは輪廻思想を受け継いだ，

というのが大方の見方だった[63]．しかし，最近の研究は，PythagorasがOrpheus教に先んじるという見解に傾いている．以下，関連資料を順次見ていく．

Hdt.II.123: 輪廻思想導入の史料の考察 1

ギリシアへの輪廻思想の導入という問題を取り上げているのはHerodotusであるが，有力な手がかりは与えてくれない．輪廻転生の思想はエジプトにはなかった．しかし，Herodotusはギリシアのものを外国起源と書く傾向があり，ここでもギリシアの輪廻転生思想をエジプト起源とする[64]．最後に，ギリシア人で輪廻転生を，先に唱えた者と，後で唱えた者を幾人か知っているが，その名は言わないと記す．その候補としてOrpheus教徒，Pherecydes Syrius，Pythagoras，Empedoclesの名を諸家は挙げる[65]．Pythagorasは有力候補ではあるが，その一方，Pythagorasを除外する解釈もおこなわれている．Hdt. IV 95は，Pythagorasの名前が書かれているので，Pythagorasを除外する[66]．また，名前を知っているが，書かないと言う言い方は，まだ存命中の人物に対する言い方である．したがって，すでに死んでいるPythagorasは除外し，Herodotusが主に念頭に置いているのはEmpedoclesであると解釈する[67]．このうちの誰をHerodotusが念頭に置いていたのかは，確定できない．οἱ μὲν ... οἱ δὲ ...という複数形の表示，ἰδίῳ「（輪廻説が自分に）固有の」，ἑωυτῶν「（輪廻説が）自分のもの」．これらの表現からわかるのは，すでにHerodotusの時代に，複数の唱道者が併存していた時代からのことしかわからず，誰が最初であったかは，確かめようもなくなっていたということである．

Hdt. II 81: 輪廻思想導入の史料の考察 2

Hdt.でもう一つの関連史料となるHdt. II 81は，内容の解釈と，テクスト校訂の問題が密接に絡み合い，いまだに解釈の結論を見ていない．該当個所のvulgateのテクストは，ὁμολογέουσι δὲ ταῦτα τοῖσι Ὀρφικοῖσι καλεομένοισι καὶ Βακχικοῖσι. ἐοῦσι δὲ Αἰγυπτίοισι καὶ Πυθαγορείοισι.このテクストは文法上解釈困難である．Ὀρφικοῖσιを男性形に解し，「オルペウス教徒は，実はエジプト人である」と読むことは，意味の点で不可能である．したがって中性形に解し，「オルペウス教の慣習は，実はエジプトの慣習である」と解することになる．また，このように読めば，引用箇所の次のτούτων τῶν ὀργίωνに自然につながるという利点を得る．一方，ὁμολογέουσιの主語は，エジプト人と解するのが自然である．引用の前の箇所でエジプト人がおおむね主語であり，συμφέρονται τόδε「（エジプト人がギリシア人と）次の点で一致する」が，二回繰り返されているからだ．しかし，この二カ所の解釈を組み合わせると，エ

ジプト人がOrpheus教の慣習と一致することになり，文意に違和感を生ずる．しかし，いわんとするとする，おおよその意味は把握できる．エジプト人のこれらの慣習（羊毛を身に着けて神殿に入らないといった，羊毛についての禁忌）は，いわゆるOrpheus的かつBacchus的な慣習と一致するが，実際にはエジプトとPythagoras派の慣習である．これによると，羊毛に関する禁忌はOrpheus教によって定められた，と一般人は信じているが，Herodotus信じるところでは，これをギリシアで定めたのはPythagorasであり，さらにそのもとはエジプトにあったことになる．輪廻転生説も，ここでは直接には言明されていないが，Pythagoras派がOrpheus教よりも先に唱えたという推測が可能となる．

他方，Herodotusの二つの有力写本は，それぞれが異なる読み方を伝える．

α系統の写本 (Stirps Florentina, ABC)

ὁμολογέουσι δὲ ταῦτα τοῖσι Ὀρφικοῖσι καλεομένοισι καὶ Πυθαγορείοισι.「かれら（エジプト人）は，この点（羊毛についての禁忌）で，オルペウス教徒と称される者たち，ならびにピュタゴラス派の者たちと一致する」

β系統の写本 (Stirps Romana, DRSV)

ὁμολογέει δὲ ταῦτα τοῖσι Ὀρφικοῖσι καλεομένοισι καὶ Βακχικοῖσι. ἐοῦσι δὲ Αἰγυπτίοισι καὶ Πυθαγορείοισι.「これらの慣習（羊毛についての禁忌）は，いわゆるオルペウス的かつバッコス的な慣習と一致するが，実際には，エジプトとピュタゴラス派の慣習なのである」

β写本はvulgateと，ὁμολογέειの読み方だけが異なる．α写本，β写本ともに，文法的解釈に関する難点はない．問題は，α写本とβ写本のどちらが真正かということである．当面の問題である輪廻思想の導入という観点から見ると，もしα写本が真正であれば，この箇所は問題になんの示唆も与えないので，考察から除外することになる．もしβ写本が真正であれば，この箇所はvulgateの場合と同じ意味を持つことになる．

一般的には，β写本はかなり加筆改竄され，α写本のほうがすぐれているとされるが[68]，この差異は絶対的と言えるほどのものではないので，個々の箇所の読み方に，この一般的傾向を適用することはできない[69]．もしα写本が真正であるなら，καὶ Βακχικοῖσι. ἐοῦσι δὲ Αἰγυπτίοισιは，後で挿入されたことになる．この場合，Ὀρφικοῖσι以下の四つの形容詞は中性形に解釈せざるを得ないので，これに合わせるために，ταῦταが主語に変更され，動詞が単数形に変えられた．もしβが真正であるなら，写字生はκαὶ Βακχικοῖσι. ἐοῦσι δὲ Αἰγυπτίοισιをまず

削除し，次に動詞ὁμολογέει を複数形に変えたことになる．しかしこの場合，動詞は単数形のままでも読解可能であり，なぜ複数形に変えるのか，という疑問が残る[70]．β写本を真正とするBurkertは別の推測をする．問題箇所の前で，συμφέρονται が二回繰り返されているので，これに同化してὁμολογέει も複数形に変えられた．この場合，主語がエジプト人に変わるので，'Ορφικοῖσι 以下の四つの形容詞は男性形に解釈せざるを得ない．男性形としたときに生じる，Orpheus教徒がエジプト人であるという難点を回避するために，καὶ Βακχικοῖσι. ἐοῦσι δὲ Αἰγυπτίοισι が削除された[71]．

このようにどちらの写本を真正としても，α写本とβ写本の関係は解釈可能で，問題の決着はつかない．二系統の写本の形成は古代にはさかのぼらず，ビザンチン時代には，削除の可能性はあっても，挿入する理由がもはやないため[72]，β写本あるいはvulgateを採用する，つまり，Orpheus教の母体がPythagoras派であったとする見解が優勢である[73]．

Ion 36 B 2 D.-K.: 輪廻思想導入の史料の考察 3

この断片でPythagorasが詩を作って，これをOrpheus作に帰したとIonは述べる[74]．しかし，これはPythagorasが詩を書き残したことを意味するものではない．Orpheusの名の下に流布している詩の本当の作者を，Ionは突き止めようとしているのである．そして真の作者をPythagorasと解しているわけである．したがって，PythagorasがOrpheus教よりも先になる[75]．

Heraclitus 22 B 129 D.-K.: 輪廻思想導入の史料の考察 4

HeraclitusがPythagorasの詐術をそしるこの断片[76]について，Dielsは，Pythagorasが著作したとは考えられないので，この断片に信憑性はないとみなす[77]．出典のDiogenes Laertiusでも，Pythagorasが著作を残したという文脈で，この断片が引用されている．しかし，ἐκλεξάμενος は「書いた」ではなく，「編集した」の意味であり，今日ではこの断片は真正であるとみなされている[78]．断片はPythagorasがある著作(συγγραφή)を編集して，博識，詐術を自分のものにした旨を述べる．このσυγγραφή については，Pythagorasがκακοτεχνίη のごとき目的で使うことができたのはHomerusやHesiodusではなく，Orpheus詩篇以外には存在しない，とBurkertは解釈する[79]．一方，Kahnは，συγγραφή が散文の論書を意味するので，Pythagoras以前の散文作家のうち，Pythagorasとの関連からPherecydesの作品を示唆する[80]．またWestは，Pythagorasが以前に編集，流布させていた，おそらくOrphicaなるタイトルが冠せられていた作品を編集し直したと解する[81]．Burkertの解釈に従えば，Orpheus教がPythagorasよりも先になる．

Westは，ここでもPythagorasが先と解する．

Epigenes: 輪廻思想導入の史料の考察 5

紀元前四世紀前半のEpigenesはOrpheus詩篇，Εἰς Ἅιδου κατάβασις，Ἱερὸς λόγοςを，CercopsなるPythagoras派の人物に，Πέπλος， Φυσικάを，Brontinusに帰している[82]．Cercopsについては，Pythagoras派という以外なにも知られていないが，BrontinusのIamblichusのPythagoras派の名鑑で確認できる[83]．Epigenesの証言は，SudaにおいてOrpheus詩篇のリストに織り込まれ[84]，そこでは，Ἱερὸς λόγοςはCercopsあるいはTheognetusのもの，Εἰς Ἅιδου κατάβασις はHerodicus，Πέπλοςは，Δίκτυονという作品とともにZopyrus，ある人によるとBrontinusのもの，とされている．ZopyrusもIamblichusの名鑑でPythagoras派と確認できる．この人物には，Κρατήρなる作品も帰されている．これらの詩篇の内容は伝わっていないが，その象徴的なタイトル名からWestは内容を再現し，Ion B 2, Hdt. II 81, Heraclitus B 129の考察と合わせ鑑みて，Orpheus詩篇の作者は，Pythagoras派内で，数学の研究，あるいはsymbolaの遵守よりも，エスカトロジに興味を抱いていた者たちであったと結論する[85]．

OrpheusとPythagorasとどちらが先かという問題についての，諸史料の検証では，BurkertのHeraclitus B 129の解釈を除いて，Pythagorasが先という結論がくだされている[86]．PythagorasはOrpheus教から輪廻思想を受け継いだという，従来，支配的であった説に従うことには，慎重にならざるを得ない．

IV 2 Pherecydes - Pythagoras

後代の証言ではあるが，魂の不死・輪廻転生を最初に唱えたとされるのはPherecydes Syriusである[87]．この証言の信憑性について考察する．

PherecydesとPythagorasとは師弟関係にあったとされる[88]．紀元前六世紀中頃をPherecydesの盛年にとれば，Pythagorasとの師弟関係は年代的には可能である[89]．しかし，Pherecydesの生涯について細部はほとんど分かっていない．PherecydesとPythagorasの関係だけが確実な事実として伝わっているとは考えにくい．これも後世の創作だろう[90]．PherecydesとPythagorasの名前を並べる最古の史料は，Ionのエレゲイア詩である[91]．Kirk-Ravenは，この詩が意味するのは，もし魂の不死という教えについてPythagorasが正しいなら，Pherecydesはあの世で喜ばしい生をすごしているにちがいない，ということであるが，後世，PherecydesとPythagorasとの関係を述べていると誤解され，この誤解に基づいて，両者の師弟関係が創作されたとする[92]．しかし，一編の詩の誤読を諸伝承の

根拠とするのは受け入れがたい．PherecydesとPythagorasとの結びつきは，必然的な原因があってのことと思われる．

両者の師弟関係のエピソードが創られたからには，Pythagorasの教えを聴いた人々が，そこにPherecydesの教えとのつながりを認知した，という事実があったにちがいない[93]．その教えは，限られた弟子にだけ明かされる秘教的なものではない．もしそうであったなら，両者の教えの共通性に気づくのは限られた者たちだけで，それは部外者には口外されることなく，PythagorasとPherecydesとの関係には，一般の人々は気づかないままであっただろうし，両者の師弟関係の伝承も創られなかっただろう．したがって，Pythagorasの教えにPherecydesの教えとのつながりを人々が聴き取った教えとは，Pythagoras派の部外者にも知られた教えでなければならない．そのような教えは，魂の輪廻説しかない．Pythagorasは輪廻を唱えたといわれているが，実際に行ったのは，前世を記憶していることの証明であった，ということを先に確認した．これと，上述のPherecydesとPythagorasの関係を組み合わせると，PythagorasはPherecydesの輪廻説をそのままの形で前提として使い，前世の記憶証明を行ったことになる．Pythagorasの証明の仕方がこのようなものであったとしたら，PherecydesとPythagorasとの間の，教えの相伝は，聴衆には明らかであっただろう．ここから両者を師弟として結びつけるエピソードが創られたと私は考える．Pherecydesは無師独学とされる．Pherecydesの生涯について書くさい，その師として設定するのにふさわしい人物がいなかったからである[94]．したがって最初にギリシア世界に輪廻思想を導入したのは，Pherecydesだったと推定できる．ここからPherecydesが最初に輪廻思想を導入し，これをPythagorasが受け継いだという仮定が成り立つ．

Diogenes Laertiusが，このIonのエレゲイアの直前に引用しているDurisの銘文は，両者の師弟関係を述べる最初期の証言の一つである[95]．これの二行目λέγε ταῦθ'は意味不明瞭で，Dielsはγ' ἔνι τοῦθ'という読み方を提案する．たとえこの箇所が解釈困難としても，Pherecydesのσοφίηと比較して，Pythagorasの蔵しているものが「それ以上のもの」τι πλεῖονと言われていることは確実である．Pherecydesの延長線上に，Pythagorasがあるものをさらにつけ加えたとみなされていたことを，Durisの銘文は物語っている．

世界創世を叙するPherecydesの主要断片からは，魂不死の教説は，うかがうすべもないが，以上の状況証拠の他に，Pherecydesが魂の不死を述べているとおぼしき断片は存在する．後代の証言ではあるが，Pherecydesはμυχοί. βόθροι. ἄντρα. θύραι. πύλαι という言葉で魂のγενέσεις. ἀπογενέσεις を謎の形で語り，地上世界をἄντρονと呼んだという[96]．θύραι. πύλαιが，魂の誕生と死との連関

で語られていたとするなら，魂が現世と冥界との間を，それらを通って出入りする有様が描かれていたと容易に想像できる．魂の生・死が往還としてとらえられていることになり，魂は不死で，再生するということになろう．またここでは，魂の死がθάνατος. ὄλεθρος. φθορά ではなく，ἀπογενέσεις という言葉で表現されている点に注目しなければならない．ἀπογενέσεις が意味するのは，消滅して無に帰することではなく，その場からの立ち退きである．立ち退く主体，この場合は魂の存在の存続することが含意されている．

以上から，輪廻思想を最初に導入したのはPherecydesであったという証言には，かなり後代のものではあるが，信憑性があるとみなせる．PherecydesとPythagorasとの間に，直接の接点があったにせよ，なかったにせよ，魂の輪廻の教えを，PythagorasはPherecydesから受け継いだと私は推測する．

IV 3 Ion B 4

Pherecydesが輪廻思想を導入し，Pythagorasが記憶のモチーフを加えた．これを例証するのが，上述のIonの断片(36 B 4 D.-K.)である．このエレゲイア詩の一般的な解釈は既述の通りである[97]．魂不死はPherecydesが最初にギリシア世界に導入し，Pythagorasはその弟子とされた．Ionもおそらくこのように信じていただろう．そうであるとすれば，一般的な解釈によると，Pherecydesは，自分が導入した説によって，自分よりも後代の者，おそらくは自分の弟子により，自分の死後の幸福が根拠づけられることになる．不自然さに目をつぶれば，この解釈も可能であるが，エレゲイア詩で想定されるPythagorasの教えを魂の不死ととると，判断の根拠はそれを導入したPherecydesにあり，あえてPythagorasの名前を持ち出す必要はなくなる．Pythagorasの名を引き合いに出しても不自然でないのは，PythagorasがPherecydesにはなかった新しい要素を持ち込み，これが判断の根拠になる場合である．

Ionの断片テクストでは，三行目で「もしPythagorasが来世のことについて正しいなら」という意味が要求される．しかし，従来の ὁ σοφὸς と読むテクストでは，この意味は明瞭には表現されない．Sandbachは，Ionと同時代の作家の書き方[98]にならって，この箇所をσοφός. ὅς に読み替える．

Ion 36 B 4, Sandbach[99]

Ὡς ὅ μὲν ἡνορέῃ τε κεκασμένος ἠδὲ καὶ αἰδοῖ
καὶ φθίμενος ψυχῇ τερπνὸν ἔχει βίοτον.
εἴπερ Πυθαγόρης ἐτύμως σοφός. ⟨ὅς⟩ περὶ πάντων
ἀνθρώπων γνώμας εἶδε καὶ ἐξέμαθεν.

三行目「もしPythagorasが真に賢いなら」は，必要な意味と等価になる．この提案以来，その後の諸版，研究書はこの読み方を採用する[100]．ここでもこのテクストを採ることにする．

σοφόςは初期の用法では，実践面でのすぐれた腕前を褒め称える言葉で，物事の本質に通じた叡知という意味はなかった．σοφόςと称されるのは哲学者ではなく，技術と経験によって家を立派に築き上げることができる大工といった職人で，特に政治の面での実践にかかわる知がσοφόςと形容された[101]．Pythagorasがσοφόςと言われる場合も，こういった意味で考えなければならない．これを裏付けるのがHeraclitus B 129である．Ionの最後の二行は，Pythagorasのσοφίηを非難するHeraclitus B 129への返答であり，これの表現を踏まえている[102]．両者の間には次のごとき字句の対応が見られる．

Heraclitus B 129	Ion B 4
Πυθαγόρης	Πυθαγόρης
ἀνθρώπων μάλιστα πάντων	περὶ πάντων
πολυμαθίην	ἐξέμαθεν
σοφίην	σοφὸς
ἱστορίην ἤσκησεν	γνώμας εἶδε καὶ ἐξέμαθεν

Heraclitusが見るところのPythagorasのσοφίηとは，断片でσοφίηνが等位接続詞なしに，πολυμαθίη．κακοτεχνίηと同格関係で並べられていることから，これらと同一視されるものと考えられる．σοφίηの具体的な内容は，Pythagoras派の部外者たるHeraclitusの耳にも，πολυμαθίηと評しうるほどに聞こえてきたからには，選ばれた弟子に秘密裏に伝授される教えではなく，一般聴衆を前に繰り広げられる前世の記憶証明である．この奇蹟によって，ギリシア世界でPythagorasが名声を博している有様にいかがわしさを感じ取り，Heraclitusはこれをκακοτεχνίηと評したのだった．他に，Pythagorasのσοφόςについて語るEmpedocles B 129のσοφῶν ἔργωνは，やはりPythagorasの行った奇蹟を意味し，これをEmpedoclesは，Heraclitusとは反対に，尊敬の念深く頌える．これらからPythagorasのσοφόςとは，物事をよく知っているという意味ではなく，霊異を行う技術に秀でているという意味であることがわかる[103]．これを賛嘆の目で見るのがEmpedoclesであり，これに怪しいものを感知するのがHeraclitusなのである．Ionのエレゲイアでは，ἐτύμωςがσοφόςを修飾している．IonがHeraclitusの断片を下敷きにしているなら，このἐτύμωςは，HeraclitusのκακοτεχνίηをΣ意

識しての使用であるだろう．つまり，Ionはἐτύμωςによって，このσοφόςが偽物としてのκακοτεχνίηではなく，Empedoclesが賞賛する意味での，真のσοφόςであるということを言わんとしているのである．Ion断片のσοφόςは，Sandbachが言うように単純に賢明であるという意味で「正しい」と等価になっているわけではない．

Heraclitusのἱστορίην ἤσκησεν. πολυμαθίηは前世と現世での知識の探求，蓄積を言う．Empedocles B 129でPythagorasが見たのは，幾世代にもわたる前世にあったことどもであった．Ionのγνώμας εἶδε καὶ ἐξέμαθενもこれらと同じ意味で解釈すべきだろう．つまり，ὅςに導かれる節は現世，前世での知見の修得を言う．D.-K.はπερὶ πάντων ἀνθρώπωνをひとまとめに読む(über alle Menschen hinaus). Sandbachは，これに反対し，この箇所がOd. I 3の反響であるとして，ἀνθρώπωνをγνώμαςにかける．Od. I 3はOdysseusが長い遍歴の過程で，様々な知見を得たことをいう．Ionの断片がこれの反響であるならば，Ionは，Pythagorasの，輪廻での遍歴を，Odysseusの遍歴と重ね合わせていることになる．この観点からも，γνώμας εἶδε καὶ ἐξέμαθενは，輪廻での知見の修得を意味すると解さなければならない．三行目のσοφόςは，これらの前世での知見に裏付けられ，前半二行，Pherecydesの，来世の運命についての叙述に根拠を与えている．Ionのσοφόςはかしこき業のなかでも，特に前世の記憶保持の業にすぐれていることを，意味内容とする．この場合，記憶の内容は，これが前半二行を根拠づけているわけであるから，そこで述べられていることである．つまり，Pythagorasは，冥界での自分の知見として，死後も徳にすぐれていれば，喜ばしい生をおくることができると述べたのである．詩全体の意味は，Pythagorasが記憶している冥界での知見が正しければ，Pherecydesは，死後も幸福な生をおくっていることだろう，ということになる．

Sandbachは，HerodotusのPythagorasについての叙述を下敷きにして，Ionはこのエレゲイアを創ったと推定する[104]．Pythagorasがエジプト人から魂不死，輪廻の教えを受けたゆえに (Hdt. II 123)，真にσοφόςであった (οὐ τῷ ἀσθενεστάτῳ σοφιστῇ. Hdt. IV 95) という，Herodotusの描く思想の伝播を，この詩にSandbachは読みとろうとする．しかし，Hdt. II 123では，Pythagorasの名が明示されているわけではない．また，そこで記されている魂不死，輪廻転生だけでは，来世でのPherecydesの有様を確証できない．このためには，冥界での見聞の記憶もともなっていることが必要となる．Herodotusまで視野に入れた解釈は，ここでは採らない．

前世の知見の記憶は，Pherecydesから受け継いだ魂不死の教説に，Pythagorasが新たにつけ加えたものである．Pherecydesにはない新しい論点が

Pythagorasにあるがゆえに，PythagorasがPherecydesの来世についての判断の根拠になった．Ionが念頭に置いていたのは，Pythagorasの魂不死の教説とされるが，厳密にはこれを前提とした前世の記憶なのである．

V katabasis

V 1 Pythagorasのkatabasisの諸伝承

Heraclid. fr. 89は，全体としてはPythagorasの魂の輪廻転生を述べているが，このなかにkatabasisのモチーフも織り込んでいる．断片中，Euphorbusの叙述内容の箇所で，περιπόλησινとὡς節が同格関係におかれている．しかし，後者の後半部分，ὅσα ἡ ψυχὴ ...は輪廻転生ではなく，katabasisにかかわる内容である．断片全体の文脈からもこの箇所は逸脱している．断片89は，全体としては，Pythagorasの前世を証明する構成になっていた．そのなかでこの箇所だけが，katabasisのモチーフになっている．これは元来のかたちにおいて，katabasisが輪廻と密接に結びついて提示されていた可能性を暗示する．

Pythagorasのkatabasisを伝える伝承史料も，katabasisの全体を伝えるものは数少ないが，部分的に伝える伝承も加えると無視できない数にのぼる．いまkatabasisを構成する要素を四つに分けてみる．

A　地下室への言及とそこへの参籠．

B　地下室から再び現れることによって，わが身の不死を証明する．

C　スピーチをする．

D　人々を納得させ，称賛を受ける．

各伝承が，これらのうちのいかなる項目を備えているかを調べる．

Hdt. IV 95	A	C	B	D
S. El. 62 ff.		B		D
Heraclid. Pont. fr. 89 Wehrli			C	
Aristophon fr. 12 PCG IV[105]			C	
Dicaearchus fr. 33 Wehrli[106]			C	D
Hermippus fr. 20 Wehrli[107]	A		C	D
Hieronymus fr. 42 Wehrli[108]			C	D
Schol. in S. El. 62	A	B	C	
Tertullianus De an. 28, 2	A	B	C	
Hippolytus Ref. 1.2.18	A			
D. L. VIII 14[109]			C	D

Porphyr. vit. Pyth. 9	A
Porphyr. vit. Pyth. 34	A
Iambl. de vita Pythag. 27	A

各伝承ともAとDの部分は，これを欠く伝承もあるものの，同じである．Dicaearchus fr. 33 WehrliはAを欠いているのではなく，Aの存在を否定している．つまり，Pythagorasは地下室に籠もり，それからスピーチをしたのではなく，イタリアに到着後，ただちに長老たちを前にスピーチをしたと，Dicaearchusは記す．これは後で述べるごとく，合理主義者Dicaearchusがkatabasisといった非合理的要素を取り除いたことに起因する．

諸伝承で相違が生じるのは，BとCの項目である．katabasisの諸伝承は，Bによる伝承とCによる伝承との二つに大別できよう．Bによる伝承では，Pythagorasが地下室に籠もって姿を消し，時を経て再び姿を現し，自分が再生して不死であることを証明することで人々の賞賛を得る．この場合，地下室での参籠は，実際のkatabasisとも解しうるし，死んだと見せかけるトリックとも解しうる．Cによる伝承では，Pythagorasは地下室に参籠し，そこを出て，katabasisにかかわるスピーチをなして，人々の賞賛を得る．地下室から再び姿を現すこと自体は，次のスピーチをするための経過点以上の意味を持たない．この場合，地下室の参籠は，katabasisとも解しうるし，katabasisは見せかけで，地下室にいる間に，誰かからスピーチのための情報提供を受けるトリックとも解しうる．これら二つのうち，Cを欠くのがPythagorasの元来のkatabasisであったなら，katabasisに関連してスピーチが行われたという事実はなかったことになり，katabasisと輪廻を述べるスピーチとは互いに別のものと考えなければならない．Bを欠くのがPythagorasの元来のkatabasisであったなら，賞賛をPythagorasが受けるのはCに拠る．Cを持つ諸伝承が伝えるごとく，魂の不死転生 (Herodotus, Heraclides)，冥界での魂の有様 (Heraclides, Aristophon, Hermippus, Hieronymus) を内容とするスピーチによって，Pythagorasは賞賛を博したことになる．Pythagorasが輪廻を提示した具体的な場を，ここに想定することができる．

諸伝承では二つのトリックが現れる．これらをここで予め整理しておく．ひとつはHerodotusのZalmoxisのエピソードにあるトリックで，地下室に籠もり，人々には死の虚報をながし，時経て姿を現し，復活を演出する．これの目的は，わが身の不死を証明することにある．これを仮に虚報のトリックと名付けておく．もうひとつは，Hermippusのエピソードに現れるトリックで，地下室に籠もり，この間，近親の者に誰が死んだのかを，書字板に書いて知らせてもらう．

地下室を出て人々にスピーチをなし，冥界で故人と出会った次第を物語り，参籠中にkatabasisをなしたことの証拠とする．これを仮に書字板のトリックと名付けておく．

以下において，BはHerodotusの創意になり，元来のkatabasisにはなかったこと，Bを伝える他の伝承はHerodotusに依拠し，固有の史料的価値はないこと，ACDのパターンがPythagorasのkatabasisであったこと，このパターンをとるHermippusが，諧謔の調子にもかかわらず，かなり正確に事実を伝えていること，katabasisに関連して輪廻のスピーチがあったことを私は示す．

V 2 Herodotus IV 95におけるBの考察

諸伝承で最古のものはHerodotusである．ただしこれはPythagorasではなく，ThraciaのGetae人のもとにいたZalmoxisにかんする伝承である．ギリシア人，特にHerodotusは，ギリシア起源のものを異民族に帰することがしばしばあり，この場合もPythagorasの話が，同じく不死を信奉するGetae人に移されたとBurkertはみなす．Zalmoxisの居場所は霊峰であり，地下室は元来Zalmoxisの伝承にはないからである[110]．この見解に立って考察する．

HerodotusはZalmoxisについて，虚報のトリックとしてのBを述べる．しかし，これはトリックとして成立するだろうか．PythagorasあるいはZalmoxisが死を偽装する．しかし，地下室の存在を多くの伝承が証言していることからわかるように，その居場所はあまねく知れ渡っている．Hdt. IV 95でも，Zalmoxisが潜んだ地下室の場所は，正確に特定されている．この矛盾は，地下室への参籠という，元からあったモチーフの痕跡が，消されることなく，Zalmoxisの話に残されてしまった結果である．虚報のトリックとしてのBは，地下室への参籠に抵触するゆえ，元来はなかったが，HerodotusがPythagorasのkatabasisをZalmoxisに移すにあたって，Zalmoxisの文脈に合わせるべく，付加した項目なのである．Herodotusが改変しなければならなかった理由は，いくつか考えられる．

1　後で述べるごとく，元来，PythagorasはDemeterのメッセージを受け取るために参籠し，再び現れてそれを伝えた．Getae人はZalmoxisを信仰する排他的な一神教で[111]，Demeter信仰をもたぬゆえに，この設定のままZalmoxisにkatabasisをさせることはできない．katabasisの動機をHerodotusは変更する必要に迫られ，元のkatabasisを，Zalmoxisが不死の教えを身を以て証明するという動機に変えた．

2　katabasis自体は，人間の不死を証明するものではない．Herodotusは，Thracia人の不死信仰との関連でZalmoxisに言及しているが，たとえZalmoxisが

自分のkatabasisを人々に話しても，シャーマンとしての権能を述べるだけで，不死の証明にはならない．Herodotusは，これを死からの復活という単純なトリックに改変し，不死信仰の文脈にふさわしいかたちにした．

3　Pythagorasの語りでは，前世としてのEuphorbusが証明の眼目になっていた．これをそのままZalmoxisに移し，Zalmoxisの前世がEuphorbusであったとは言えない．Zalmoxisの物語では，Euphorbusは除外せざるを得ない．しかし，Euphorbusを欠いたスピーチでは聴衆を納得させることはできない．HerodotusはZalmoxisにわが身で証明させて初めて，話を信憑性のあるものにすることができた．

4　Pythagorasのスピーチでは，Pythagorasは輪廻転生というかたちでの不死を説く．この輪廻転生をそのままZalmoxisに当てはめることはできない．Getae人のもとではZalmoxisは神であり，死者はこの神のもとへ行くと信じられていた．Zalmoxisは現世での死を受け入れない，絶対的な意味での不死でなければならない．したがって，輪廻についてのスピーチの代わりに，Zalmoxis自身の不死の証明にHerodotusは替えた．

以上からHdt. IV 95のBは，HerodotusがPythagorasの話をZalmoxisに移すにさいし，改変した結果であることが確認できる．BがHerodotusによる付加であるとすれば，元のkatabasisはACDのパターンであったことになる．

Bを採る伝承は，Herodotusの他にいくつかある．これらはHerodotusのZalmoxisに依拠しているのだろうか，Herodotus以外の伝承に依拠しているのだろうか．もし後者であれば，その伝承のBが，元のkatabasisに遡る可能性も出てくる．つまり，Bを含むパターンがkatabasisの原型であるかもしれない．この問題について，Bを採る伝承を順次調べていく．

V 3 Soph. El. 62ff.におけるBの考察

Soph. El.前半でOrestesは，敵討ちのために，自分が死んだという嘘報をながす策略を考えつく．しかし，自分の死という不吉な言葉が，現実になるかもしれない恐怖に襲われる．この恐怖を鎮めるために，死を噂されたが，実際には生還して尊敬を受けたσοφοίの事例に言及する．しかし，ここでSophoclesはσοφοίの名を記していない．σοφοίが誰なのかを調べ，この一節がPythagorasにかかわる史料であるのかどうかを確かめる必要がある．

諸注釈書，研究書はσοφοίの候補として，Pythagoras, Odysseus, Aristeas, Epimenides, Zalmoxis, Hermotimusの名を挙げる[112]．しかし，これらのなかにはS. El. 62 ff.の文脈に合わない者もいる．この文脈を確認し，これに合う者を，Sophoclesが意中にしていたσοφοίとして特定することにする．S. El. 62 ff.は，

狭い文脈と広い文脈の二つのなかに置かれている.

(i) 狭い文脈では, Orestesの恐怖を鎮めるという意味で, 自分の死という不吉な言辞(λόγῳ. φάτιν S. El. 55. λόγῳ 59. ῥῆμα 61. λόγῳ 63. φήμης 65)にもかかわらず, 実際には(ἔργοισι 60)生存していたという事例として, σοφοίを挙げる.

(ii) 作品全体の広い文脈では, 誤報をながす策略によって名声, 利益を得る(κλέος 60. κέρδει 61. ἐκτετίμηνται 64. ἄστρον ὡς λάμψειν 66)事例として, σοφοίを挙げる.

諸家の挙げる候補者の伝承を, これら二つの点につき調べる.

Zalmoxis: S. El. 62 σοφοίの特定 1

Hdt. IV 95では, Zalmoxisが姿を消すと, 人々はZalmoxisが死んでしまった(ὡς τεθνεῶτα. Hdt. IV 95)として嘆く. しかる後, Zalmoxisが地下室から現れ, 生存を証明する. 死の言辞があったにもかかわらず, Zalmoxisは実際には生存していた. したがって, (i)に合致する. 饗応の席での自分のスピーチを信じさせるためにこのようなトリックをZalmoxisはたくらんだ. これが成功し, 自分の言葉を信憑性あるものにした(πιθανά ... ἐγένετο. Hdt. IV 95). それゆえGetae人はZalmoxisを神と崇めた(Σάλμοξιν δαίμονα. Hdt. IV 94; δαίμων τις Γέτησι. Hdt. IV 96). したがって, (ii)をも満たす.

SophoclesとHerodotusとの親交は, つとに指摘されるところである. HerodotusがAthenaeに寄ったさい, Sophoclesが属するサークルで自分の旅行について話す機会があり, Sophoclesには自分の初稿の閲覧を許したとJacobyは推測する[113]. 事実, Sophoclesのいくつかの作品では, Herodotusが半ば引用に近いかたちで活用されている[114]. El. 62 ff. もHdt. IV 95に着想を得た箇所とみなしてよいだろう[115]. Sophoclesは, Herodotusの描くZalmoxisの物語のACBDの後半BDを, そのまま写しているのである. この場合, BDのみを写し, 地下室に言及するAまでは入れないことで, Zalmoxisが消えたにもかかわらず, 居場所は分かっているという矛盾まで劇作品に持ち込むことは回避できる, という思惑もはたらいたのではないかと思われる.

Odysseus: S. El. 62 σοφοίの特定 2

Odysseusのkatabasis(Od. XI)は文字どおりのkatabasisであって策略の要素はない. Odysseusが死んだという言辞もない. (i), (ii)をともに満たさない.

Epimenides: S. El. 62 σοφοίの特定 3

Epimenidesは数十年間眠ったのち，家に帰ったという伝承が伝えられている[116]．Epimenidesの行方不明は眠りによるとされ，死とは記されていない[117]．しかし，人々はこの間かれを死んだものとみなし，アテナイの浄め祓いという事績はσοφοίにふさわしい．(i)の条件は，半ば満たしているといえる．人々の前から姿を消したのは意図的ではないから，策略による名声の要素はない．

Aristeas: S. El. 62 σοφοίの特定 4

Aristeasについての最古の証言はHdt. IV 13-15である．HerodotusはAristeasが二回消えた顛末を物語る．最初の縮絨工房での消滅は二所出現とも[118]，Apollonに拉し去られたとも[119]解釈されている．後世の伝承では，Aristeasの魂が自由に脱魂してさまよい，再び体に帰還したという[120]．工房で死んだと思われたのも，魂が脱魂したために擬死状態（ἐγγύτατα θανάτου. Maximus Tyrius X 2 f.）になったためか．現象の解釈はともかく，ここで問題になるのは，Aristeasが死んだという言辞があったか否かである．Herodotusは，Aristeasが死んだという噂(τοῦ λόγου ... ὡς τεθνεὼς εἴη. Hdt. IV 14)の広がった次第を明記している．そしてこの噂をArtaceから来た男が否定し，その報告の正しさを人々は工房に着いて確認する．したがってAristeasは(i)を満たす．これに続く，Aristeasの六年間の行方不明は，生存が確認された後のことであるので，国内不在，おそらくArimaspea創作のための知見を広めるための遍歴による．よってここでの考察の対象にはならない．

伝承の一つによると，Aristeasが自分の師の名を挙げることができないので，人々はAristeasを信じなかった．それゆえAristeasは，魂が飛翔して見聞した異邦のことどもを語ったという (Max. Tyr. XXXVIII 3 c-f.)．ここに，人々を信じさせ，名声を得るという伝承の存在は確認できる．しかし，ここでは魂の遍歴は事実として述べられ，ここに策略の意味はない．また証言自体も後代のもの（A. D. 2 C)である．(ii)は満たさない．

Hermotimus: S. El. 62 σοφοίの特定 5

Hermotimusの魂の脱魂は，シャーマンの力能として理解されていた．脱魂中の身体は，死と誤解されることなく，「半生状態」(corpore ... semianimi, Pliny, N. H. VII 174)として正しく解されていた．死んだという言辞はないので，(i)は満たさない．

Hermotimusの魂の遊離は文字どおりのシャーマン的行為であって，策略の要素はない．またこれによって名誉を得るどころか，密通している妻によって殺されてしまう．(ii)も満たさない．

Pythagoras: S. El. 62 σοφοίの特定 6

Pythagorasの伝承で(i)を伝えるのは，Hdt. IV 95, Schol. in S. El. 62, Tertullianus De an. 28, 2の三カ所である．このうち，Hdt. IV 95のZalmoxisについての死の虚報がHerodotusの創作になることは，先に示したとおりである．Hdt. IV 95を除いて(ii)を伝える伝承はない．

Schol. in S. El. 62では，虚報のトリックにともなって，まずPythagorasが死んだという言辞が広められる(λογοποιεῖν ... ὡς τεθνηκὼς εἴη)．しかし，このトリックで不死の証明となるはずのPythagorasの再出現は，スピーチへの経過点以上の意味を持たない．次のスピーチでは，転生，冥界でのこと，故人の有様，前世の記憶をPythagorasは話す．最初の虚報のトリックからすれば，Pythagorasは地下室に籠もっているだけで，実際にkatabasisを行うわけではない．しかるにスピーチは，katabasisによって冥界を訪れた者でしか語り得ない内容になっている．この矛盾は古註作者が従来の伝承を，無批判，網羅的に採録したことに起因する．母親への唐突な言及から，古註作者はHermippusの伝承をもとに，S. El. 62 ff.を説明しようとしたことがわかる．しかし，古註作者はS. El.のテクストを前にして，Hermippusの書字板のトリックでは，El.の虚報のトリックを説明できないことに気づく．それで，S. El. 62 ff.の，直接の典拠であるHdt. IV 95の虚報のトリックに改変したと私は推測する．古註後半で言及のあるPythagorasの前世は，PyrrhusがPythiusに替わっている他はHeraclidesの転生譜と同じであることから，典拠はHeraclidesと推定できる．古註における(i)はHdt. IV 95に依拠し，古註に(ii)はない．

他に(i)を伝えるTertullianusは，生存年A. D. 2 C - 3 Cからして，これまでに未知の史料を使っているとは信じがたい．Schol. in S. El. 62とTertullianus De an. 28, 2との類似は一読して感知できる．ともにPythagorasの母親に言及し，Pythagorasのスピーチ内容は，冥界での故人と転生譜である．この類似は，TertullianusがSchol. in S. El. 62を写したことを暗示する．ただ，Tertullianusは劇作品への註釈ではないゆえに，古註で消された書字板のトリックを，Hermippusの元の形に戻している．しかし，虚報のトリックの部分はそのまま残したために，虚報のトリックと書字板のトリックを二つとも併用することになった．その結果，冥界の故人についてのスピーチは，Pythagorasがkatabasisをなしたことの証明になるのみならず，地下室への潜伏期間中，Pythagorasが冥界にいた，つまり，死んでいたことをも証明することになり，死からの復活をも演出する効果をあげている．二つのトリックを整合的に組み合わせるという妙想は，S. El. 62 ff.の虚報のトリックはそのままにして，Hermippusの書字

板のトリックを復元した結果ではないかと私は推測する．このような経緯で書かれたTertullianus De an. 28, 2に現れる，死の，不吉な言辞(i)は，S. El. 62 ff.を経由して，HerodotusのZalmoxisのエピソードに依拠していることになる．(ii)はここに描かれていない．以上からσοφοίの候補としてのPythagorasは，HerodotusのZalmoxisに還元されることになる．

S. El. 62 ff.のσοφοίとしてSophoclesの念頭にあったのは，第一にHerodotus伝えるところのZalmoxisであった．Orestesをして死の言説の実現という恐怖を払わせるには，反例は多いほうがよい．したがって，S. El. 62 ff.の文脈に部分的に一致するAristeas, Epimenidesもσοφοίに数えられよう．

以上から，S. El. 62 ff.のBは，Hdt. IV 95に依拠していることになる．Hdt. IV 95については既述．

V 4 Schol. S. El 62, Tert. De an. 28, 2におけるBの考察

他にB伝承を採るのは，上述のS. El. 62への古註である．古註はEl 62ff.に当てはまる人物としてPythagorasのみを挙げ，Pythagorasのkatabasis関連の説明を加え，最後にOdysseusの可能性を否定する．S. El. 62 ff.の考察で立てた項目(i)は，Pythagorasのkatabasis伝承では，虚報のトリックと等しい．虚報のトリックは，B，すなわち，地下室に籠もった後，姿を現すという行為にたいし，これをトリックとみなす一解釈である．よって，(i)は虚報のトリックとしてのBに等しい．したがって，Schol. S. El 62のBについても，先のSchol. S. El 62での(i)の考察と同じことが当てはまる．古註のBは，ZalmoxisのBに還元されるものであり，独自の史料的価値を主張するものではない．既述のごとく古註を写すTertullianusも同様となる．

Hdt. IV 95のBは，HerodotusがPythagorasの元来のkatabasisをZalmoxisに移すにさいし，その文脈に合わせるべくつけ加えた項目であった．その他の，S. El 62ff., Sch. S. El 62, Tertullianus De an. 28, 2のBは，Herodotusに遡源する．よって，BはPythagorasのkatabasisに元来なかったことが確認できる．Bがなかったならば，賞賛の原因としてCしか残らない．したがって，ACDがPythagorasの，元来のkatabasisのパターンであったと私は考える．

V 5 Hermippus fr. 20: katabasisの原型

Hermippusのkatabasisについての叙述はパロディである．よって，katabasisは事実として存在しなかったとRohdeは解釈する[121]．しかし，事実があったからパロディも可能になる．Hermippusの伝承は，katabasisがむしろ事実としてあっ

たことを示している．内容の解釈の点では，Delatteは，Pythagorasが誰にも知られずに地下室をつくり，そこから現れて復活を演出し，信者から疑いを除いたというBを認める解釈をする[122]．しかし，虚報のトリックに不可欠の死の虚報が叙述には欠落している．また，人々が感銘を受けるのは，潜伏・再出現というパフォーマンスにたいしてではなく，スピーチにたいしてである(σαινόμενοι τοῖς λεγομένοις ἐδάκρυόν τε καὶ ὤμωζον)．また，Pythagorasは母親に，参籠中の出来事を書字板に書いて地下室に降ろすことを頼む．このHermippusの設定は，Pythagorasが最初からスピーチによる説得を視野に入れていたことを前提にしている．Hermippusの記述は，Bを含まないACDの構成であり，その諧謔の調子にもかかわらず，かなり正確に事実を伝えているのである．

Hermippus伝えるところのkatabasisについては，Burkertが正しい解釈を下していると私は考える[123]．BurkertはPythagorasのkatabasisを，Demeterの祭儀と結びつける．Hermippusの断片では，母親が地下に籠もったPythagorasに情報をもたらす．Pythagorasが母親とともにイタリアに上陸したという伝承はない．母親への唐突な言及は，katabasisの原型の合理化に起因する．原型とは，Pythagorasが地下室に籠もり，母神Demeterのメッセージを授かり，これをたずさえて地上に帰還するという祭儀である．それで，この地下室はDemeterの聖域になった．Pythagorasは，Demeter祭儀の神官の役割を果たしていた．Pythagorasの伝記で，繰り返し現れる黄金の大腿部も，この説を補強する．大地母神信仰に帰依する者は，灼熱した針で印を体に焼き付けられた．大腿部に傷のある者だけが，冥界に降りることを許された．Pythagorasの黄金の大腿部も，これと同じ意味を持つ．

katabasisの主要史料，Hdt. IV 95とHermippus fr. 20の相違は，このDemeter祭儀としてのkatabasisにたいする解釈の相違として説明できる．Hermippusの断片は，多くのkatabasis伝承のごとくには，HerodotusのZalmoxisの話に依拠していない．両者の伝承は，地下室への参籠，人々への来世のことについての告知の点で共通する．他方，両者は，構成が互いに異なるほかに，Herodotusの伝承が，虚報のトリック，人の不死を内容とするスピーチを伝えるのにたいし，Hermippusは，書字板のトリック，冥界での故人の有様を内容とするスピーチを伝える．これは，一方が他方に依拠し，部分的に相違が生じたからではない．参籠は，元来，祭儀として行われていた．その痕跡を両史料ともに伝える点では共通する．しかし，後世，祭儀の文脈は忘れ去られ，意味不明となってしまった伝承にたいする，トリックによる合理的解釈の仕方の点で，相違が生じたのである[124]．

Burkertの解釈に立てば，PythagorasはDemeterのメッセージを授かるべく，

地下の部屋に籠もった．冥界に降りてメッセージを授かり，地上に帰還した．人々はこれを聴聞するために参集した，という輪郭が浮かび上がってくる．

V 6 前世の記憶告知の場としてのkatabasis

Heraclides fr. 89でのkatabasisと前世の記憶との関係について，Rohdeは，katabasisの話に連動して前世の想起が，偽Pythagoras文書に記されていたと主張した．しかし，katabasisという冥界での見聞によっては，Pythagorasは，前世がEuphorbusであったと言うことはできない．それで後の解釈では，この関係を逆転し，前世想起の叙述がkatabasisをも含んでいたとする[125]．だがこの解釈でも，前世の記憶がkatabasisの内容をすべて説明できるわけではない．前世の記憶によってHieronymus, Aristophonらが伝える冥界の有様は説明しうる．これにたいし，Hermipp. fr. 20 およびこれに依拠するSchol. S. El. 62, Tertullianus De an. 28, 2で，Pythagorasが人々に語るのは，Pythagorasが参籠中にみまかった故人の冥界での有様である．これは前世の記憶によって語りうる内容ではない．katabasisと前世の記憶とを，内容面だけから考えるかぎり，両者が整合することはない．Rohdeは内容面だけを考察し，katabasisの状況は顧慮していないが，katabasisの主要史料，Hdt. IV 95, Hermippus fr. 20は，むしろkatabasisの状況を詳しく伝える．内容のみならず，katabasisの場をも考察に加えなければならない．

katabasisの諸伝承中，事実を最もよく伝えるHermippusでは，スピーチの内容は冥界からの到来のみが告げられて，他は記されていない．聴聞した人々の反応が，ἐδάκρυόν τε καὶ ὤμωζον と表現されていることから，Schol. S. El. 62, Tertullianus De an. 28, 2が明確に書いているように，冥界における故人，おそらくは最近みまかった人々の有様を述べるのが，その内容であったと思われる．katabasisからの帰還という設定からして，Pythagorasがまず冥界で会った故人のことを話した，というのは確実だろう．しかし，スピーチがこの主題に限定されていたとは考えられない．この主題だけに言及があるのは，Hermippusが書字板のトリックという設定にしたので，これにかかわる内容だけが記される結果になったからにすぎない．魂が脱魂して遍歴し，様々な知見を得る．このシャーマン的な行為の先例にはすでにAristeas, Hermotimusがいた．冥界の有様を語るというのは，これらの先例に比べて，特にPythagorasを際立たせるものではない．参集した人々が期待したのも，故人の冥界での様子ではなく，Demeterのメッセージなのである．

Dicaearchus fr. 33 Wehrliは，CrotonでPythagorasの説教聴聞のために集会が設けられ，長老会，青年，少年，女性にPythagorasが説教した次第を記す．集

会を設けたのが年齢別性別であったということは，聴衆に合わせて説教の内容も様々に変化したことを意味する．Pythagorasが四つの集会で，故人のことだけを語りつづけたとは考えられない．Pythagorasの教えは応病与薬として，聴聞者が誰であるのかによって，変幻自在であったと考えるべきである．Pythagorasの知見を特徴づけるのは莫大な知識の量である．katabasisによって語りうる知見は，前世からの記憶に蓄えられた知見にくらべると，取るに足りないほどわずかである．たとえkatabasisを証明できたとしても，前世の記憶を証明できるわけではない．これでは，Pythagorasは知識の，莫大な富(μήκιστον πραπίδων ... πλοῦτον. Emp. B 129)を誇ることはできない．それでPythagorasは，Heraclidesfr.89に見られるように，katabasisと前世の記憶とを，同じスピーチで話したと私は推測する．Pythagorasは自分が前世Euphorbusなりしことをも述べることで，EuphorbusからPythagorasに至る間の現世，来世における知見を記憶していることを証明した．これによって真であることが保証される自分の知見の量を，katabasisによる場合にくらべて，大幅に拡大したのだった．

VI 結論

Heraclides fr. 89では，Pythagorasが輪廻思想を表明していると，一般には解釈されてきたが，むしろ前世の記憶が主なモチーフとなっている．Pythagorasが前世としてEuphorbusを選んだのは，その証明が可能であったからに他ならない．Pythagorasは，前世がEuphorbusであったことを示すことで，前世を記憶していることの証明を行ったのである．この記憶が，Pythagorasの功力の根拠となっていた．このような自分の優れた能力の証明は，奇蹟と同一水準に置かれるべきものである．Pythagorasは，魂の不死・輪廻の思想を教説として説いたのではなく，これを前提として，前世の記憶保持の証明という奇蹟を行ったのだった．Pythagorasは，Demeter祭儀の一環として，katabasisを行った．これが記憶証明の奇蹟を行う場となった．

VII エピローグ，Porphyr. vit. Pyth. 19

VII 1 Porphyr. vit. Pyth. 19 の信憑性

Porphyr. vit. Pyth. 19は，Pythagorasが魂不死・輪廻転生を唱え，初めてギリシア世界にこれを紹介した次第を記す．この箇所の直前の18節が，Dicaearchusからの引用であることは確実であるが，19節をも引用箇所に入れるかどうかが問題となる．もし19節もDicaearchusの真正な証言であるなら，本論文の問題，

Pythagorasが輪廻思想を提示した具体的状況の再構成，にたいする解答を，この19節において，我々はすでに手中にしていることになる．世界を周遊したPythagorasがイタリアに上陸した．その声望ゆえに，人々はPythagorasに説教を勧請した．老若男女別の集会で，Pythagorasは魂の輪廻転生の教説を，ギリシア世界で初めて説いた．人々は賛嘆して，諸国から弟子が集まった．

Porphyriusの叙述では，Pythagorasは輪廻思想を奇蹟とは関係なく，教説として，つまり，自分が行脚して見聞した教えを紹介する，というかたちで説いたことになる．Pythagorasの知見の広さも，輪廻転生での記憶ではなく，諸国行脚(πολυπλάνου)によるものである．集会でPythagorasが，輪廻にかかわる内容を説いたという事実認識の点では，Porphyr. vit. Pyth. 19は，本論の結論と一致する．しかし，Porphyriusが奇蹟の要素を払拭し，著しく合理化している点で，本論の結論と対立する．もしこの箇所が，Dicaearchusの真正な証言として認められ，信憑性のある史料であることが判明すれば，本論の結論は大幅な変更修正を余儀なくされよう．よって最後に，Porphyr. vit. Pyth. 19がDicaearchusの引用箇所であるか否かを，確認しなければならない．

Pythagorasの教えを証言するテクストがほとんど伝承していないだけに，その一端を明確に「教説」として叙述するPorphyr. vit. Pyth. 19は，諸家の注目を集めてきた．このうちの一人Burkertは，19節をPorphyrius自身の叙述ではなく，Dicaearchusからの引用とみなす根拠を述べる．Porphyriusは史料を引用する場合，長い一節を引用するのが常套である．事実，PorphyriusによるDicaearchusの二番目の引用は長い一節である[126]．よって引用の節は長くとるべきである．また，19節中の一句，οὐδὲ εἷς ἔχει φράσαι βεβαίως.はPorphyriusにはそぐわない．その理由は，まず，すでにPythagorasの知識についてPorphyriusは詳細を述べている(Porphyr. vit. Pyth. 6 f.)．次に，Speusippus, Xenocrates, HeraclidesによるPythagoras像が確立した後で，このような表現をするとは，考えにくいからである．この一句は，魂の不死を信じなかったDicaearchusにこそふさわしいものである．さらに，19節で述べられる万物の円環的な再起は，Dicaearchusの仲間，EudemusによってPythagorasのものとされている[127]．Burkertの他に，19節をDicaearchusからの引用とみなし，真正な史料とするのは，Rohde, Delatte, Casel, Burnet, Lévy, Minar, Diels-Kranz, Guthrie, 廣川，Huffman[128]である．

しかし私は，19節はDicaearchusからの引用ではないと主張する[129]．以下，Burkertの挙げる根拠を論駁し，次に19節が真正な史料ではないことを示すその他の論点を指摘し，この箇所がDicaearchusの断片ではないことを示す．これによって本論で導出した結論に，変更の必要のないことを確認する．

VII 2 Porphyriusの引用

Burkertは，長く引用するのがPorphyriusの流儀であるとする．Porphyriusが，実際にどれほどの長さで引用しているのかを確認するために，作品中の引用箇所の長さを調べる．引用範囲の確定は，それ自体で難しい問題をはらんでいるが，Rohde, Des Places[130]に従い，引用箇所の行数を数える．テクストはBudé (Des Places) に拠り，半行に満たないものは数えず，半行以上の行は一行に数える．

Porphyr. vit. Pyth.

節	出典	引用箇所	行数
1-2	Νεάνθης	οἱ μὲν ... πρεσβυτέρους.	19
2	Ἀπολλώνιος	Ἀπολλώνιος δ' ... φησὶν οὗτος.	10
3	Δοῦρις	Δοῦρις δ' ... ἀναθήματι γεγραμμένας.	12
4	Τίμαιος	Τίμαιος δ' ... καλεῖν μουσεῖον.	4
5	Λῦκος	Λῦκος δ' ... δὲ Μεταποντῖνον.	6
7	Εὔδοξος	πλὴν τοσαύτῃ ... μηδέποτε πλησιάζειν.	4
7-8	Ἀντιφῶν	Ἀντιφῶν δ' ... οὐχ εὑρίσκεται.	20
9	Ἀριστόξενος	Γεγονότα δ' ... ἅπαρσιν ποιήσασθαι.	5
10-14	Διογένης	Διογένους δ' ... φασιν ὀνομάζεσθαι.	51
14-15	Διονυσοφανής	Ὡς Ἡρακλέα ... ξένος ἀνήρ.	6
18	Δικαίαρχος	Ἐπεὶ δὲ ... αὐτῷ κατεσκευάσθη.	12
21-22	Ἀριστόξενος	Ἃς δ' ... πάντων ἀμετρίαν.	22
32-35	Διογένης	Τὴν δὲ ... ἐκεῖνον ἐθεάσατο.	48
41-42	Ἀριστοτέλης	Ἔλεγε δέ ... ὑπόθεσις γίνεται.	31
44	Διογένης	Ἱστοροῦσι δ' ... ἀνθρωπείου γόνου.	11
44-45	Ἡρακλείδης	εἰ δὲ ... βίου ἀφικνεῖται.	14
48-53	Μοδέρατος	Ἡ δὲ ... ἀπέβη ὕστερον.	82
54-55	Ἀριστόξενος	Πυθαγόρας δ' ... καὶ κατέλευσαν.	27
55	Νεάνθης	δύο ἐκφυγόντων ... διδάσκαλος γέγονεν.	4
56	Δικαίαρχος	Δικαίαρχος δὲ ... Πυθαγορείων καλοῦντες.	20
57	Δικαίαρχος	Ἐν δὲ ... ἡμέρας διαμείναντα.	3
59-61	Ἀριστόξενος	ἐξ ὧν ... Διονυσίου ἀπήγγειλεν.	31
61	Ἱππόβοτος. Νεάνθης	Ἱππόβοτος δὲ ... Τιμύχας ἱστοροῦσι...	1

Porphyriusは数頁におよぶ長い引用をする場合もある．しかし，特別に長い引用の数カ所を除けば，18節，Dicaearchusの12行は標準的な数字であり，決して不自然ではない．ちなみに，BurkertがDicaearchusの引用に加える19節は14行である．さらに，たとえ主要な典拠であっても，その引用が常に長大な一節になるとは限らない．Aristoxenusは，引用が31行に及ぶ場合もあれば，5行しかない場合もある．Diogenesの引用は，51行に及ぶ場合もあれば，11行の場合もある．このような数字に比べると，56-57節におけるDicaearchusからの引用23行にたいする，19節の12行は穏当な数字である．

VII 3 οὐδὲ εἷς ἔχει φράσαι βεβαίως.

Porphyr. vit. Pyth. 19を真正とする研究者は，οὐδὲ εἷς ἔχει φράσαι βεβαίως. という表現に慎重な懐疑の態度を読みとり，これを信憑性の根拠とする．ネオプラトニズムの哲学者は，何事でも信じる傾向があったので，かくのごとき慎重な表現をPorphyriusが使うはずはない．それゆえ，この表現とともに紹介される内容には，かえって史料としての信憑性があるとみなす[131]．しかし，この一句は懐疑を表明した表現なのであろうか．

Burkertは，紀元前4世紀に，Speusippus, Xenocrates, HeraclidesによるPythagoras像が確立した後で，οὐδὲ εἷς ἔχει φράσαι βεβαίως.とPorphyriusが語るのはふさわしくないとする．では，これらの哲学者らの後，Pythagorasの教説の不明不確定を口にする作家は誰もいないのだろうか．この点を，三編の『ピュタゴラス伝』において調べる．Pythagorasの教説が不確定であることの原因は二つある．ひとつは，Pythagoras派が学外の者に，教説を沈黙してもらさなかったこと．ひとつは，Pythagoras派が内輪だけで通じるsymbolaを使って教説を伝え，その真意は学外の者には聴いても分からなかったこと．Porphyr. vit. Pyth. 19は，前者の原因による不確定であるが，後者の原因も教説不明となる要因であったので，これらふたつの原因による教説不明を述べた箇所を調べる．おもにRohdeによってこれらの証言の直接の典拠をも記す．Iamblichusの名が挙げられている箇所は，Iamblichus自身の筆になると推定される文章である．

Iambl. de vita Pythag. (Deubner)

節	(ページ・行)	典拠
2	(p. 5, 16 - 20)	Iamblichus[132] AD 3-4 C
87	(p. 51, 10 - 12)	Nicomachus AD 1-2 C
93-94	(p. 54, 28 - p. 55, 5)	Apollonius AD 1 C
104-105	(p. 60, 16 - 22)	Iamblichus[133]

226-27	(p. 121, 25 - p. 122, 3)	Iamblichus[134]
245	(p. 131, 18 - 22)	Iamblichus
247	(p. 132, 23 - p. 133, 2)	Iamblichus
252	(p. 135, 21 - 22)	Nicomachus

Porphyr. vit. Pyth. (Des Places)

53	(p. 61, 12 - 20)	Moderatus AD 1 C
57	(p. 64, 13 - 15)	Nicomachus

この調査から明らかとなるのは，SpeusippusらがPythagorasの教説を確立した後も，依然としてその不明不明確を，諸家は連綿と語りつづけたということである．師の教えの守秘は，Pythagoras派に刻印された特徴である．このPythagoras派についての伝統に従って，教説の不明が後世になっても語られたのである．これを述べる諸哲学者がPythagoras派について無知であったわけではなく，実際には銘々は，Pythagorasの教説と自らが信じるところのものを詳述する．教説不確定の言辞は，Pythagoras派を語るさい，有名な教えの守秘に付随して述べられる，定型的な文句なのである．秘匿にもかかわらず，自らの知るPythagorasの教説を述べるというのは，Pythagorasについて論述するさいの，常套的表現である．したがって，「一人として確かに示すことはできない」と記されていても，これを文字通りに受け取ってはならないし，これがPythagorasの輪廻説にたいする懐疑を表明する一句であると解することもできない．また，先にPorphyriusがPythagorasの教えを詳述し[135]，ここで誰一人として教説を知らないと言ったとしても，矛盾にはならない．

Burkertの最後の論点，Porphyr. vit. Pyth.19でDicaearchusの同僚，Eudemusの見解が表明されているという指摘も，この箇所がただちにDicaearchusの言葉であると確言せしめるほど強力な論拠ではない．

VII 4 Pythagoras派における沈黙

次にBurkert批判以外の論点を挙げていく．Porphyr. vit. Pyth. 19は，部外者に口外しないという沈黙が並のものではなかったために，Pythagorasの教えを誰も確かには言えないとする．ここで「沈黙」を意味する言葉としてσιωπήを使う．このσιωπήは一部の研究者によって注目されてきた．Caselは，このσιωπήが，弟子を鍛錬する沈黙と教説黙秘の沈黙の二つを包括する表現であるとする[136]．Delatteはこのσιωπήを，Aristoteles, Aristoxenus, Timaeusとならんで，Pythagoras派の沈黙を証拠立てる証言とみなす[137]．

しかし，このσιωπήは，Pythagoras派の用語法に反する誤用であると，私は判断する．Pythagoras派の沈黙には，ふたつを見分けなければならない．両者は，ギリシア語では書き分けられていた．沈黙のひとつは，学派内で修行のために課される無言行で，ギリシア語ではσιωπήで書き表す．ひとつは，学派外の者に師の教えを口外しないという，教説の守秘・黙秘で，これはἀπόρρητα で書き表す．三編の『ピュタゴラス伝』，およびPythagorasに関連する論書において，この二語の用例を調べる．出典が確認できる場合にはそれも記す．

σιωπήの用例

	典拠	意味
Iambl. de vita Pythag.		
15	Apollonius	黙したまますわる
68	Apollonius	無言行
71	Apollonius	無言行
71	Apollonius	無言行
72	Apollonius	無言行
74	Nicomachus	無言行
90	Iamblichus	無言行
188	Apollonius	無言行
195	Iamblichus	無言行
197	Aristoxenus	黙って怒りをこらえる
225	Apollonius	無言行
Porphyr. vit. Pyth.		
19		教えの黙秘

ἀπόρρητα の用例

Iambl. de vita Pythag.		
2	Iamblichus	教えの黙秘
14	Apollonius	教えの黙秘
31	Aristoteles	教えの黙秘
103	Iamblichus	教えの黙秘
104	Iamblichus	教えの黙秘
226	Iamblichus	教えの黙秘
258	Apollonius	教えの黙秘
Iambl. Prot. (Des Places)		

1 p.41, 23	Iamblichus	教えの黙秘
21 p.131, 18	Iamblichus	教えの黙秘
21 p.132, 23	Iamblichus	教えの黙秘 = Iambl. v. P. 104
21 p.133, 4		教えの黙秘
21 p.138, 4		教えの黙秘
Iam. De communi mathematica scientia liber. (Festa)		
p.74, 19		教えの黙秘
p.75, 3		教えの黙秘
Porphyr. vit. Pyth.		
20	Nicomachus	教えの黙秘
Diogenes Laertius		
VIII 46		教えの黙秘

σιωπή. ἀπόρρητα は厳密に使い分けられていることがわかる[138]. σιωπή は, Iambl. de vita Pythag. 15と197の一般的な意味での用例を除いて, 学派内での修行を意味する, Pythagoras派特有の用語として用いられている. ἀπόρρητα は, 例外なく, 教えの黙秘を意味する用語として用いられている. 問題のPorphyr. vit. Pyth. 19では, 「沈黙」の意味は, 部外者にたいする, 教えの黙秘であるので, ἀπόρρητα と書くべきところ, σιωπή が誤用されている. Pythagoras派固有の用語の誤用は, この箇所の信憑性を疑わせるものである.

Pythagorasは, 学派外の部外者に教えを口外することを厳禁し, 学派内でも修行の度合いに従って, 教えの内容も変化した. Pythagorasは, 誰に教えを語るのかという点について厳密だったのである. Porphyr. vit. Pyth. 19では, 守秘されるべき教え, つまり, 弟子らのうちでも特定の者だけに授ける教えを, Pythagorasが一般の人々に説教したと叙述し, 教えの内容と, 聴く者との対応に混乱を示す. この点も, 19節の, 史料としての信憑性を疑わせる.

VII 5 史料伝承の観点から見たPorphyr. vit. Pyth. 19の信憑性

PythagorasがCrotonの人々に説いた説教は, 後世, いくつかの史料で内容が伝えられている. Rohdeはこれらの諸史料の伝承経路を跡づける[139].

Justin XX 4では, Pythagorasが倫理を説く説教者として描かれ, Pythagorasが母親らと子供らにたいする説教で, Iamblichusにおけると同様, 母親らに淑徳と夫への従順を, 子供らには節制と学芸への熱意を教示する. さらに質素を強調して, 豪華な衣服, 装飾品を捨て, Junoに捧げるように母親らを説得する. これはIambl. de vita Pythag. 56での, Pythagorasの説教の内容と, 女らが感化

されて，ヘラ神殿に衣服を奉納したという記事に一致し，共通の史料を典拠にしていることがわかる．

Justin XX 4には，Metapontumの人々がPythagorasの死後，その家を神殿にしたという記事がある．Iambl. de vita Pythag. 170にも同様のことが述べられている．この場合は，両者の典拠は，同内容の証言を残しているTimaeusであると特定できる[140]．Iambl. de vita Pythag. 56では，Pythagorasの女らへの説教の最後で，女の年齢ごとの名称としてκόρη. νύμφη. μήτηρが列挙される．これはTimaeusの叙述を，そのまま受け継いだものである[141]．IamblichusとJustinの共通する記事，IamblichusのTimaeusへの史料の依存，これらを考え合わせると，IamblichusとJustinの共通の典拠は，Timaeusであったと推定できる[142]．

Iambl. de vita Pythag. 37, 40, 47はそれぞれ，時間の上で先行するものへの敬い，人との交際の仕方，神にたいする誓いの禁止を述べる．これらと，Diog. Laert. VIII 22, 23で列挙されているPythagorasの教えとの，内容のみならず表現の次元でのいちじるしい類似も，二つの証言がTimaeusを典拠にしているということから説明できる．Diogenes Laertiusにおいては，これら三つの教えは，Timaeusに由来すると証明できる教え[143]μόνον τὸν ἀναίμακτον βωμὸν προσκυνεῖν. ならびにἴδιον μηδὲν ἡγεῖσθαι.にはさまれているからである．

以上のような，Pythagorasの説教内容の伝承関係から，Rohdeは，Porphyr. vit. Pyth. 18, 19でDicaearchusが伝えている，長老・青年・少年・女性へのPythagorasの説教という枠組みに，TimaeusがPythagorasの説教の内容を埋め，これがJustin, Iamblichus[144], Diogenes Laertiusに継承されたと考える．

諸史料間の関係は，Rohdeの解釈するとおりであろう．しかし，Porphyr. vit. Pyth.19をもTimaeusの典拠とする見解は容認しがたい．もしPorphyr. vit. Pyth. 19も，18節につづいてDicaearchusの証言であったとするなら，19節で述べられているPythagorasの教説は，Timaeusを経由して，Justin XX 4, Iambl. de vita Pythag. 37-57, D. L. VIII 22-23の三カ所に反映されてしかるべきだろう．しかし，19節で唯一周知とされる教説，魂不死・輪廻転生・生物類縁は，この三カ所に継承されていない．

Diog. Laert.では生物を神に生け贄として捧げるべからずという指示に，生物類縁の思想の反映を見ることができる．しかし，生物類縁そのものが教説として説かれているわけではない．その他は長上を敬えといった倫理にかかわる教えである．

Delatteは，D. L. VIII 22-24で列挙されている諸条項の中に，さらにこまかくTimaeus典拠の箇所を特定する[145]．D. L. VIII 22-24でDiog. Laert.は，様々なPythagorasの教えを整理することなく，集めたままのかたちで記録したと

Delatteは考える．そして教えの一つ一つについて典拠を推定する．その結果，列挙される教えの出典を半分はTimaeus，半分はAristoxenusと結論する．またTimaeusを典拠とする教えでも，Pythagorasが一般聴衆に語った教えではなく，弟子に日常の習慣とすべき教えとして説いたἱερὸς λόγοςに由来するものを幾つか特定する[146]．これらの典拠確定の結果，Timaeus由来で，PythagorasがCrotonの一般人に説いた教えとみなせるのは，神々への誓いの禁止，年長者への尊敬などを内容とする μηδὲ ὀμνύναι ... μηδὲν ἡγεῖσθαι. (D. L. VIII 22 - 23, Marcovich, p. 586, 1 - 10)の箇所である．ここでは，魂不死・輪廻転生の教説は，反映されていない．

Iambl. de vita Pythag. 37-57のPythagorasの一連の説教でも，教説の痕跡とみとめられるのは，生物を屠る生け贄を禁止している点だけである(Iambl. de vita Pythag. 54)．他は長上への敬い，節制，教養，正義，修学のすすめといった倫理的な内容になっている．Justin XX 4では，Pythagorasは道徳を説くのみである．

Porphyr. vit. Pyth. 19の，唯一周知であるはずの教説は，後世の継承史料に，ほとんど反映されていないことが確認できる．この矛盾はPorphyr. vit. Pyth. 18, 19を，Dicaearchusの証言と仮定したことに起因する．年齢・性別ごとにわけられた聴衆にPythagorasが語りかけたという状況は，後世の史料にも反映しているので，Porphyr. vit. Pyth. 18は，Dicaearchusの真正な証言と見なせる．さらに近隣諸国からの，Pythagorasへの弟子入りを希望する人々の参集を述べる19節初めの信憑性は，Aristoxenusの証言によって裏付けられる[147]．したがって，諸史料の伝承から信憑性を確認できるのは，18節初めから19節途中のβασιλεῖς τε καὶ δυνάστας までの箇所である．ἃ μὲν以下の輪廻思想を述べる19節教説箇所(Porphyr. vit. Pyth. 19, Des Places, p. 44, 18 ff.)は，元来Dicaearchusの証言には含まれていなかったのである．

VII 6 Dicaearchus

Dicaearchus MesseniusはAristoteles門下の哲学者で，Aristoxenusと同期．かれの名はまずβίος πρακτικόςと結びつく．かつてDicaearchusとTheophrastusとが，最善の生き方について論争したさい，Theophrastosが，βίοθεωρητικόςに，つまり，観想的で，学問の研究に捧げられた生き方に，絶対的優位を与えるのに対し，Dicaearchusはβίος πρακτικόςをはるかに卓越した生き方とみなした[148]．この見解を裏付けるかのように，七賢人を世事に疎い沈思黙考の人ではなく，実践にかかわる生き方をした面々であったとする[149]．哲学することは政治を執ることである．昔，哲学者はいかに執政すべきかを思索するのではなく，

実際にみずから立派に執政していた[150]という見解をとるDicaearchusは，「βίος πρακτικόςの熱烈な擁護者」「βίος πρακτικόςへの偏愛」さらには「骨の髄までの物質主義者」とまで論評されている[151].

Dicaearchusの論述は歴史，政治学，文学，哲学，地理学の多岐にわたる．論著の一つ，Βίοι (φιλοσόφων) はPythagorasの伝記を含むが，そこでDicaearchusは，Pythagorasにまつわる奇蹟譚は無視して，もっぱら実践にかかわる哲学者として，つまり，偉大な政治改革者として描く[152]. Porphyr. vit. Pyth. 18もこの伝記の一断片である．またDicaearchusはΠερὶ ψυχῆς なる総称の，Κορινθιακός. Λεσβιακόςという二編の対話編を残している[153]. その内容の，かすかな痕跡はおもにCiceroの言及からうかがえる．魂(animus)は無であり，人間にも動物にも魂は内在してはいない．活動・感覚の原動力は身体中に拡散していて，身体からは分離できない．身体を離れては何も存在し得ないからだ．仮にこの原動力を魂と名付けるとしても，当然この魂は不死性にあずかるがごときものではない[154]. 魂不死を否定する点で，師Aristotelesとはあえて異なる見解をDicaearchusは主張する[155]. それだけにこれがDicaearchus自身の強い信念であったことがうかがえる．DicaearchusはPythagorasを，政治活動の点では，Porphyr. vit. Pyth. 18におけるがごとくに称揚するが，輪廻といった教えについては評価せず，Pythagorasを絶対的に理想化したりはしない[156].

魂不死を奉じないDicaearchus[157]が，Pythagorasの輪廻説にPorphyr. vit. Pyth. 19で言及しているとするならば，それはこの説の批判を目的としてのことである．しかし，この19節はPythagoras批判にふさわしい文脈になっているであろうか．19節にはμεγάλη δόξαの字句が見られる．ギリシアに輪廻思想を導入したのはPythagorasが最初であったという記載も，Pythagorasが他の追従者ではなかったという意味で，賞賛する言葉であろう．19節では，Pythagoras賞賛の文脈中に輪廻の教説が置かれているのである．これは輪廻を否定する立場をとるDicaearchusの書き方にそぐうものではない．もし19節をDicaearchusのものとすると，輪廻説は18節で述べる「たくさんの麗しい教え」のひとつということになる．Dicaearchusが輪廻を念頭にして「麗しい教え」と言ったとすれば，これはアイロニーとしての他，解釈不能となる．Dicaearchusが，同じくPythagorasの輪廻転生の系譜について述べる一節では，Heraclidesの転生譜において楯を選び取る，系譜で眼目となるHermotimusを削除し，これに替えて「Alcoという名の，見目麗しい娼婦」をつけ加える[158]. このような諧謔に満ちた表現が，Dicaearchusの輪廻説に対する態度表明なのである．

以上からPorphyr. vit. Pyth. 19教説箇所は，Dicaearchusからの引用ではなく，Porphyrius自身が書いたと私はみなす．Pythagorasが各種の集会で説教を行った，

という証言をDicaearchusが残す．Pythagorasの伝記作者らは，この説教がいかなるものであったのかを述べる誘惑に駆られる．Iamblichusは，TimaeusとApolloniusの創った内容でこの説教を埋め合わせ，Porphyriusは，Pythagorasの教えとして唯一周知であった輪廻転生説をこれにあてはめた．これが事実関係であったと私はみる．

この箇所の輪廻の記述は「まず・・・つぎに・・・これに加えて・・・」(πρῶτον ... εἶτα ... πρὸς τούτοις ...)と叙述され，体系的，分析的である．Pythagorasの輪廻思想を教説δόγμαとして規定したのも，これが初めてである．こういった点から，前世の記憶証明の奇蹟という，原初の文脈から切り離されて，語った内容だけが再構成され，体系的に整理されて「教説」となった有様がPorphyr. vit. Pyth. 19から確認できる．輪廻転生はPythagorasの「教説」であったが，学派の黙秘にもかかわらず周知になったという，今日，意識的，あるいは無意識的に受け入れられている図式は，すでに三世紀にできあがっていたのである．

Porphyr. vit. Pyth. 19, 教説箇所には，史料としての信憑性はないと私は結論する．よって，本論の結論を変更修正する必要をみとめない．

[1] "ὡς ἀθάνατον εἶναί τὴν ψυχήν. εἶτα μεταβάλλουσαν εἰς ἄλλα γένη ζῴων. ... τὰ δόγματα" (Porphyr. vit. Pyth. 19), "animam sic semper eandem esse, sed in varias doceo migrare figuras." (Ovid., Met. XV 171-72), "la doctrine de la métempsycose" (Rohde, E., Psyché, trad. par A. Reymond, Paris, 1928, 401 n 1), "die Seelenwanderungslehre" (Nilsson, M. P., Geschichte der griechischen Religion, 1. Bd. 2. Aufl. München, 1955, 701), "the doctrine of metempsychosis" (Huffman, C. A., "The Pythagorean tradition" in The Cambridge Companion to Early Greek Philosophy, Cambridge, 1999, 70).

[2] Arist. fr. 192 Rose^3 = Arist. p. 132 Ross = Iambl. de vita Pythag. 30. 他にPythagoras派の教説守秘を証言するのはAristoxenus fr. 43 Wehrli = D. L. VIII 15.

[3] Arist. fr. 196 Rose^3 = Arist. p. 135 Ross = Porphyr. vit. Pyth. 41.

[4] Arist. fr. 197 Rose^3 = Arist. p. 136 Ross = Hieronymus adv. Rufin. 1. III

p. 469.

[5] Hdt. II 123. 幾人かのうちにPythagorasを数えない解釈もあり.

[6] Fränkel, H., Dichtung und Philosophie des Frühen Griechentums, München, 1962, 4. Aufl. 1993, 311. Jaeger, W., Humanistische Reden und Vorträge, Berlin, 1960, 288 f.

[7] Huffman, op. cit. 70.

[8] Rohde, E., Psyche. Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen II, Freiburg i. B., Leipzig und Tübingen, 1898, Darmstadt, 1961 (= Psyche II) 163.

[9] Cornford, F. M., "Mystery Religions and Pre-socratic Philosophy" in The Cambridge Ancient History IV, Cambridge 1926, 546.

[10] Heraclides fr. 89 Wehrli = Pythag. 14 A 8 D.-K. = D. L. VIII 4-5.

[11] Pherecydes fr. 109 (FGrHist 3) = fr. 66 (FHG I 88) = fr. LXXIII Sturz = Schol. Apoll. Rhod. I 645.

[12] Dielsは, Aethalidesへの言及があるため, このPherecydesを, Pythagorasと関係の深いPherecydes Syriusと考える(D.-K. I 50). Jacoby, Rohdeは, A. R. の古註でPherecydes Athenaeusが頻繁に引用されるのにたいし, Pherecydes Syriusの引用は他にないので, Pherecydes Athenaeusと考える(Jacoby, FGrHist. Erster Teil a, Kommentar, 419; Rohde, Psyche, II 167 Anm. 1).

[13] acme B. C. 544 - 541, Pherecydes 7 A 1 D.-K.; 7 A 1 a D.-K.

[14] Arist. Met. I 984b15-20 = Anaxag. 59 A 58 D.-K.; Wellmann, E., RE VIII s. v. Hermotimos, 904 f.; Diels-Kranz II 21 Anm.; Ross, W. D., Aristotle's Metaphysics I, Oxford 1924, 136; Dodds, E. R., The Greeks and the Irrational, Berkeley & Los Angeles, 1954, 143, 164 n. 50. 他にHermotimusとAnaxagorasの関係を証言するのは, Arist. fr. 61 Rose^3 = p. 42 Ross = Iamb. Prot. 8 (48. 9-21 Pistelli); des Places, É., Jamblique Protreptique, Paris, 1989, 158, n. 1.

[15] Rohde, Psyche II, 418; Burkert, W., Weisheit und Wissenschaft. Studien zu Pythagoras, Philolaos und Plato, Nürnberg, 1962, (= W. W.) 115. Lore and Science in Ancient Pythagoreanism, translated by E. L. Minar, Cambridge, Massachusetts, 1972, (= L. S.) 139; Wehrli, F., Die Schule des Aristoteles VII, Herakleides Pontikos, 2. Aufl. Basel/Stuttgart, 1969, 90; Delatte, A. La vie de Pythagore de Diogene Laërce, Bruxelles 1922, Hildesheim 1988 (= Delatte, V.

P.), 155; Gottschalk, H. B., Heraclides of Pontus, Oxford, 1980, 116.

[16] Rohde, Psyche II, 418.

[17] Burkert, W. W. 115, L. S. 139.

[18] Heraclides fr. 89 以外ではEuphorbusの楯を選ぶのはPythagorasである. Hippol. Haer. I 3, 3; Diod. X 6, 2; Porphyr. vit. Pyth. 27; Iambl. de vita Pythag. 63; Ovid. Met. XV 160-64.

[19] A. R. I 641ff.; Scholia A. R. I 645 = Pherecydes 7 B 8 D.-K.

[20] Scholia vetera in Apollonii Argonautica e codice Laurentiano ex recensione Henrici Keilii, Lipsiae, 1854, 339.

[21] Rohde, Psyche II, 168, Anm.

[22] Delatte, V. P. 107 n. 7-12.

[23] Callimachus, Iambus I, fr. 191 58-62 Pfeiffer = Thales 11 A 3a D.-K.; D. L. I 24-25 = Thales 11 A 1 D.-K.

[24] D. L. I 29 = Thales 11 A 1 D.-K.

[25] Diod. (X 6, 4)はこの箇所をἑπταμήκηという形で引用しているが，意味は不明である. LSJはἑπταμήκηにperh. referring to the Pythagorean harmony of the planetary spheresという説明を与えるが，Revised Supplement (1996)は見出し語自体の削除を指示する. この箇所はなんらかの修正が必要であろう. ここではDielsの提案するἕλικαを採り，Burkert (W. W. 397 Anm. 125, L. S. 420, n. 106)の解釈に従う.

[26] Wellmann, E., RE VIII s. v. Hermotimos, 904 f.

[27] von Geisau, H., RE XXIV s. v. Pyrrhos, 108. Pyrrhusについて伝えるのは文献は三つのみ. D. L. VIII 4-5; Tertull. de an. 28. 31; Gell. IV 11, 14.

[28] Burkert, W. W. 115 Anm. 113, L. S. 138 n. 104.

[29] Bluck, R. S., Plato's Meno, Cambridge, 1964, 65; Rohde, Psyche II, 185, Anm. 2; Delatte, V. P. 157.

[30] Emp. fr. 31 B 129 D.-K. = fr. 99 Wright = Porphyr. vit. Pyth. 30 = Iambl. de vita Pythag. 67, vv. 1-2 = D. L. VIII 54.

[31] D. L. VIII 54 = Timaeus fr. 14 (FGrHist 566)

[32] Rohde, E., Psyche II, 160 Anm. 1.

[33] Emp. 31 B 111 D.-K. = fr. 101 Wright = D. L. VIII 59; Emp. 31 B 112 D.-K. = fr. 102 Wright = vv. 1, 2, 4-11 D. L. VIII 62, v. 3 Diod. XIII 83. 2, vv. 10, 12 Clem. Strom. VI 30. 3; Emp. 31 B 146 D.-K. = fr. 132 Wright = Clem. Strom. IV 150. 1.

[34] Arist. fr. 191 Rose^3 = Arist. p. 130 ff. Ross = Apollonius mirab. 6, Aelian. var. hist. 2, 26, Aelian. var. hist. 4, 17, Iambl. de vita Pythag. 140-143.

[35] Iambl. de vita Pythag. 88, 150, 255.

[36] 諸家も断片129はPythagorasのことを述べているとする．Delatte, V. P. 157 n. 1; Rohde, Psyche II, 186, Anm. 2, 417; Lévy, I., Recherches sur les Sources de la Légende de Pythagore, Paris 1926, 6 n. 2; Diels-Kranz, I 364; West, M. L., The Orphic Poems, Oxford, 1983, 11; Guthrie, W. K. C., A History of Greek Philosophy (= H. G. P.) I, Cambridge 1962, 161, II 1965, 251; Burkert, W. W. 113, L. S. 137; Huffman, op. cit. 72, 85 n. 16; Cornford, F. M., Principium Sapientiae, Cambridge, 1952, 56; Dodds, op. cit. 143; Morrison, J. S., "Pythagoras of Samos," Classical Quarterly, 6, 1956, 136. Jaegerは，断片129をPythagorasに関連づける見方は古くから伝承されていたとはみなしがたいとし，慎重論を採る．Jaeger, W., Die Theologie der frühen griechischen Denker, Zürich, 1953 (= Theologie) 173 f.

[37] Wright, M. R., Empedocles: The Extant Fragments, New Haven 1981, 258; Zhmud, L., Wissenschaft, Philosophie und Religion im frühen Pythagoreismus, Berlin, 1997, 33 f.

[38] Heraclides, fr. 89 Wehrli, Xenophanes 21 B 7 D.-K., Hermippus fr. 20 Wehrli, Hieronymus fr. 42 Wehrli, Schol. S. El. 62, Tertullianus De an. 28, 2.

[39] Arist. fr. 191 Rose^3 = Arist. p. 130 ff. Ross = Apollonius mirab. 6, Iambl. de vita Pythag. 142.

[40] Frank, E., Plato und die sogenannten Pythagoreer, Halle 1923, 356 Anm. 166; Cherniss, H., Selected Papers, Leiden 1977, 99; Kirk-Raven, The Presocratic Philosophers, Cambridge 1957, 219; Burkert, W. W. 145 f., L. S. 213; Bluck, op. cit. 65; O'Brien, D., Empedocles' Cosmic Cycle, Cambridge, 1969, 335 n. 1; Guthrie, H. G. P. II 251; Dodds, op. cit. 143.

[41] Xenophanes 21 B 7 D.-K. = D. L. VIII 36.

[42] Burkert, W. W. 98, L. S. 121; Diels-Kranz, I 490.

[43] Rohde, E., Psyche, II 162 Anm. 6.

[44] Johannes Lydus De mensibus IV 42 99 Wünsch = Herakleides fr. 41 Wehrli = fr. 291 Kern.

[45] Arist. fr. 191 Rose^3 = Arist. fr. p. 132 Ross = Iambl. de vita Pythag. 142.

[46] Delatte, V. P. 106 n 6.

[47] Delatte, V. P. 158.

[48] ἕλιξは，惑星の運行を説明するための専門用語である．Taylor, A. E., A Commentary on Plato's Timaeus, Oxford, 1928, 205.

[49] Burkert, W. W. 397 Anm. 125, L. S. 420, n. 106.

[50] Burkert, W. W. 397 f., L. S. 420.

[51] Arist. fr. 191 Rose^3 = Arist. p. 130 f. Ross = Aelian. var. hist. 2, 26, Iambl. de vita Pythag. 140; Arist. fr. 192 Rose^3 = Arist. p. 132 Ross = Iambl. de vita Pythag. 30.

[52] Burkert, W. W. 117, L. S. 140 f. 他にGottshalk (op. cit. 116) がこの解釈をthe most attractiveと評する．

[53] チェントローネ『ピュタゴラス派』斉藤憲訳，東京，2000，80, n. 16.

[54] AethalidesもArgonauticaに名を残している．しかしこれはHeraclides fr. 89に基づいてのことである．

[55] Porphyr. vit. Pyth. 26; Iambl. de vita Pythag. 63.

[56] Arist. fr. 191 Rose^3 = Arist. p. 131 Ross = Aelian. var. hist. 4, 17.

[57] Arist. fr. 191 Rose^3 = Arist. p. 131 f. Ross = Iambl. de vita Pythag. 140-143.

[58] Iambl. de vita Pythag. 143, Rose (Arist. fr. 191)の断片引用直後の箇所．

[59] ὑπὸ πολλῶν. πολλούς (Arist. fr. 191 Rose^3 = p. 131 Ross = Aelian. var. hist. 2, 26), πολύς (Arist. fr. 191 Rose^3 = p. 131 Ross = D. L. VIII 11)

[60] Delatte, V. P. 159; Diod. X 6. 2-3.

[61] Heraclides fr. 89においては，前世を「語る」は直接話法ではἔλεγεになるλέγειν (l. 2 Wehrli), ἔλεγεν (l. 7 Wehrli)という未完了過去形によって表現されている．Empedocles B 129では前世のことどもを想起する行為は，general condition (vv. 4-6) の構文で書かれている．Pythagoram ... Euphorbum primo

fuisse dictitasse (Dicaearchus fr. 36 Wehrli = Gellius N. A. IV 11, 14).

[62] West, op. cit. 15.

[63] Rohde, Psyche II, 109; How W. W. and Wells, J., A Commentary on Herodotus, vol. I, Oxford 1912, 226; Guthrie, W. K. C., Orpheus and Greek Religion, London, 1935 (= Orpheus) 220; Kern, O., Die Religion der Griechen II, Berlin, 1935, 162; Jaeger, Theologie, 105; Nilsson, op. cit. 701 f.; Bluck, op. cit. 61 ff., 247 ff.

[64] Burkert, W. W. 103, L. S. 126; Guthrie, H. G. P. I 160.

[65] Abicht, K., Herodotos Buch II, Leipzig, 1861, 323, οἱ πρότερον Pherecyd. Pyth. οἱ ὕστερον Emp.; Sayce, A. H., Herodotos I-III, London, 1883, 193, πρό. ὕστ. Pherecyd. Pyth. Emp.; Rohde, Psyche II 134, Anm. 1, πρό. ὕστ. Orph. Pherecyd. Pyth. Emp.; Stein, H., Herodotos Buch II, 5. Aufl. Berlin 1902, 140, πρό. Orph. Pherecyd. Pyth. ὕστ. Emp.; How W. W. and Wells, J., op. cit. 226, πρό. Orph. Pyth. ὕστ. Emp.; Waddell, W. G., Herodotus Book II, London, 1939, 229, πρό. Orph. Pherecyd. Pyth. ὕστ. Emp.; Kirk-Raven, op. cit. πρό. Orph. Pyth.; Guthrie, H. G. P. I, 160, πρό. ὕστ. Orph. Pyth.; Bluck, op. cit. 66, πρό. Pyth.; West, op. cit. 8 n. 11, πρό. ὕστ. Pyth. Emp.; Burkertは確実な結論は出せないとし態度保留 (Burkert, W. W. 103, L. S. 126).

[66] Zhmud, op. cit. 118.

[67] Hdt. I 51, IV 43. Burnet, J., Early Greek Philosophy, 4th ed. London, 1930, 88 n. 5.

[68] Jacoby, F., RE Suppl. II s. v. Herodotos, 515 f.

[69] Linforth, I. M., The Arts of Orpheus, Berkeley, 1941, 44; Burkert, W. W. 104, L. S. 127.

[70] Linforth, op. cit. 46.

[71] Burkert, W. W. 105 Anm. 49, L. S. 128 n. 47.

[72] Burkert, W. W. 104 Anm. 41, L. S. 127 n. 40.

[73] vulgateに基づく解釈をするのはGuthrie, Orpheus, 16, 272 n. 4. β写本を採るのは, Dodds, op. cit. 169 n. 80; Burkert, W. W. 103 ff., L. S. 127 f.; West, op. cit. 8 n. 10; Parker, R., Miasma, Oxford, 1983, 290 n. 46; Lloyd-Jones, H., Greek Epic, Lyric, and Tragedy, Oxford, 1990, 93. 近代のテクストではSteinの

みがα写本を採り，Hude, Abicht, Sayce, Waddellはvulgateのままである．α写本を採る研究は，Linforth, op. cit. 47; Morrison, op. cit. 136.

[74] Ion 36 B 2 D.-K. = D. L. VIII 8.

[75] Burkert, W. W. 105 f., L. S. 129 f.; West, op. cit. 7.

[76] Heracleitus 22 B 129 D.-K. = fr. XXV Kahn = fr. XVII Bywater = D. L. VIII 6.

[77] Diels-Kranz I 181; Fränkel (op. cit. 438)は，断片全体は真正とするが，ἐκλεξάμενος ταύτας τὰς συγγραφὰς の箇所には疑問符を付す．

[78] Kranz, Diels-Kranz ibid. ; Kahn, C. H., The Art and Thought of Heraclitus, Cambridge, 1979, 113; West, op. cit. 8 n. 12; Burkert, W. W. 107, L. S. 131; Burnet, op. cit. 134 n. 2; Kirk, G. S., Heraclitus, The Cosmic Fragments, Cambridge, 1954, 390.

[79] Burkert, W. W. 107 f., L. S. 131.

[80] Kahn, op. cit. 113.

[81] West, op. cit. 8 f.

[82] Clem. Str. I 21, 131 = Kerkops 15 D.-K. = test. 222 Kern = Call. fr. 449 Pfeiffer.

[83] test. 174 Kern; Iambl. de vita Pythag. 267 = Pythagoreische Schule 58 A D.-K. 他にAlkmaion 24 B 1 D.-K. = D. L. VIII 83.

[84] Suda s. v. 'Ορφεύς = test. 223 d Kern.

[85] West op. cit. 9 ff.

[86] Burkertは，すでに早い時期に問題の答は不明になってしまっているとし，古代の証言は各証言者の立場から答を求めようとしているとみなす．混沌としたOrpheusの諸詩篇に実在する人物を捜す者はPythagorasに行き当たり，Pythagorasの独創性を疑う者は，PythagorasがOrpheus教に追随したと証言した．Burkert, W. W. 108, L. S. 131.

[87] Pherecydes 7 A 2 D.-K. = Suda s. v. Φερεκύδης; Pherecydes 7 A 5 D.-K. = Cic. Tusc. I 16, 38, Aponius, Cant. 3, 5.

[88] Pherecydesについては，Pythagorasが弟子であったという伝承がいくつか伝えられている．デロス島でPherecydesが死の床にあるとき，Pythagorasが師を看病し，死後は埋葬したという．これらの伝承は三つに分けられる．ひとつ

の伝承では，Pherecydesの死はPythagorasがサモス島からイタリアへ出奔する以前のこととする（Porphyr. vit. Pyth. 56 = Dicaearch. fr. 34 Wehrli; Porphyr. vit. Pyth. 15）．したがって，Polyclatesのサモス支配以前，紀元前五四〇年頃の出来事となる．別伝ではPherecydesの死は，ピュタゴラス派にたいする最初の反乱のときのことであった（Porphyr. vit. Pyth. 55, cf. Iambl. de vita Pythag. 248ff. = Aristoxen. fr. 18 Wehrli; Iambl. de vita Pythag. 184, 252 (Nicomachus)）．したがって，紀元前五一〇年頃の出来事となる．第三の伝承は上記二つの折衷案で，ピュタゴラス派への反乱と結びつけることなく，Pythagorasはイタリアからデロス島へ行ったとする（Diodor. X 3, 4 = 7 A 4 D.-K.）．

[89] Pherecydesの年代については，七賢人と同時代(Arist. fr. 75 Rose^3 = Arist. p. 71 Ross = D. L. II 46; Pherekydes 7 A 1 D.-K. = D. L. I 116; Hermippus fr. 6 Wehrli = 7 A 2 a D.-K. = D. L. I 42)，リュディアのAlyattes王の治世に生き，Olympiad XLV (600-597)の頃に誕生(Suda s. v. Ἑκαταῖος = 7 A 2 D.-K.)，盛年はOlympiad LIX (544-541)(D. L. I 121 = 7 A 1 D.-K.)という証言が残っている．紀元前六世紀中頃に活躍したとし(Kurt von Fritz, RE XIX s. v. Pherekydes, 2028)，Pythagorasに看取られての死を五四〇年以降のあるときと考えれば，年代的にはつじつまが合う．

[90] Kirk-Raven, op. cit. 51.

[91] Ion 36 B 4 D.-K. = fr. 30 West = fr. 4 Bergk = D. L. I 120.

[92] Kirk-Raven, op. cit. 51 f.

[93] Rohde, Psyche II, 167, Anm. 1.

[94] Pherecydes 7 A 2 D.-K. = Suda s. v. Φερεκύδης; Kirk-Raven, op. cit. 52.

[95] Duris fr. 22 (FGrHist 76) = D. L. I 120.

[96] Pherecyd. 7 B 6 DK = Porph. de antr. Nymph. 31, Procl. in Tim. 29 A.

[97] Kirk-Raven, op. cit. 51; Kurt von Fritz, RE XIX s. v. Pherekydes, 2028.

一般的ではない解釈を展開するのがZhmudである(Zhmud, op. cit. 32 f.). Pythagorasの知の根拠は記憶にあるのではなく，Pythagoras自身の現世における知的探求にあると，ZhmudはIonの詩の解釈で主張する．すなわち，περὶ πάντων ἀνθρώπων γνώμας εἶδε καὶ ἐξέμαθεν は，Pythagorasの魂についての教えに関連するものではなく，そのあらゆる分野での認識活動に言及している．Pythagorasが真に，莫大な真理を他の人よりも深く理解した賢者であったら，魂について彼が抱いている見解もまた真である．これがIonがいわんとしたこと

である．以上のようにZhmudは主張するが，現世での知的探求は，前世の記憶による知に矛盾するものではない．Pythagorasが記憶しているのは，現世を超越した真理ではなく，前世で経験した諸々の出来事なのである(Cherniss, op. cit. 99; Bluck, op. cit. 71)．これらについての記憶が，現世に引き継がれていくことによる知の堆積，これがPythagorasの知である．Zhmudが指摘する知的探求は，Pythagorasの知のシステムに反するものではなく，むしろそのプロセスに必須の要素として組み込まれているのである．

[98] ἦν Λακεδαιμόνιος Χείλων σοφός. ὃς τάδ' ἔλεξε (Kritias 88 B 7 D.-K. = D. L. I 41); σὺ δ' οὐ σοφός. ὃς τὸν Ἔρωτα. κτλ. (Sophocles, fr. 3 Diehl)

[99] Sandbach, F.H. 'Ion of Chios on Pythagoras', Proc. Cambr. Ph. Soc. 5 (1958/59) 36.

[100] West, M. L. (ed.), Iambi et Elegi Graeci, vol.II, Oxford 1972, 79; Marcovich, M. (ed.), Diogenis Laertii Vitae Philosophorum, vol. I, Stutgardiae et Lipsiae 1999, 88 f.; Burkert, W. W. 100, L. S. 123; Zhmud, op. cit. 32; Bluck, op. cit. 67.

[101] Fränkel, op. cit. 275.

[102] Diels-Kranz I, 380 Anm.; Delatte, V. P. 162 f.; Sandbach, ibid; Morrison, op. cit. 136. Diels-Kranzはさらに Empedocles B 129にも参照指示している．

[103] Kirk, op. cit. 390.

[104] Sandbach, ibid.

[105] Aristophon fr. 12 PCG IV = frr. 12, 13 CAF II = 58 E 3 D.-K. = D. L. VIII 38.

[106] Dicaearchus fr. 33 Wehrli = fr. 29 (FHG II, 244) = Porphyr. vit. Pyth. 18.

[107] Hermippus fr. 20 Wehrli = fr. 23 (FHG III 41) = D. L. VIII 41.

[108] Hieronymus fr. 42 Wehrli = D. L. VIII 21.

[109] D. L. VIII 14 = 14 A 12 D.-K. = Aristoxenus fr. 24 Wehrli = fr. 10 (FHG II 273); Parmenides 28 A 40a D.-K.

[110] Burkert, W. W. 138, L. S. 158 f.

[111] Hdt. IV 94. 藤縄謙三『歴史の父ヘロドトス』東京，1989，231．

[112] Pythagoras (Scholia); Pythagoras (Wunderus, E., Sophoclis Tragoediae.

Vol. II, Sect. I. Electra, Gothae, 1844, 14 f.); Aristeas, Pythagoras, Epimenides, Solon, Zalmoxis, Zaleucus (Campbell, L., Sophocles vol. II, Oxford, 1881, 138); Odysseus, Pythagoras, Epimenides, Zalmoxis, Aristeas, Hermotimus (Tournier, É., Les Tragédies de Sophocle, Paris, 1886, 122); Pythagoras, Zalmoxis (Schneidewin, F. W., Sophokles, Elektra, besorgt von A. Nauck, Berlin, 1893, 45); Zalmoxis, Aristeas (Kaibel, G., Sophokles Elektra, Leipzig, 1896, 78 f.); Pythagoras, Zalmoxis, Aristeas (Jebb, R. C., Sophocles, Part VI, The Electra, Cambridge, 1907, 15 f.); Zalmoxis, Aristeas (Kamerbeek, J. C., The Plays of Sophocles, Commentaries V, The Electra, Leiden, 1974, 28); Aristeas, Hermotimus, Zalmoxis (Dodds, op. cit. 141, 162 n. 39); Pythagoras (Burkert, W. W. 140, L. S. 161); Zalmoxis, Pythagoras, Aristeas (Bolton, J.D.P., Aristeas of Proconnesus, Oxford, 1962, 145).

ここでCampbellはZaleucus, Solonの名を挙げている．しかし立法家Zaleucusについてkatabasisの伝承はない．Eust. Ad. Odyss. p. 1961, 10でZalmoxisと書くべきところ，Zaleucusと誤記した箇所を，誤記のままCampbellが受け入れたためと思われる．Solonについてkatabasisの伝承は見あたらない(Aly, RE III s. v. Solon, 946 ff.). CampbellがSolonの名を挙げる根拠は不明．Zaleucus, Solonは考察から除く．ほかにKellsは，作品が戦時中に上演されたゆえ，戦死の誤報がとどいた後で生還した兵士をS. El. 62 ffは念頭に置いているとする．(Kells, J. H., Sophocles Electra, Cambridge, 1973.) しかし，そのような兵士がσοφοίと称されうるのか疑問である．またそのような事例もKellsは挙げていない．

[113] Jacoby, F., RE Suppl. II s. v. Herodotos, 234.

[114] Soph. Antig. 904 ff. - Hdt. III 119; Soph. O.T. 981 - Hdt. VI 107; Soph. O.C. 337 ff. - Hdt. II 35.

[115] Soph. El. 62 ff. - Hdt. IV 95の照応を指摘するのは，Jebb, Schneidewin, Kaibel, Kamerbeek.

[116] Epimenides 3 A 1 D.-K. = fr. 67a (FGrHist 115) = D. L. I 109; Epimenides fr. 67b (FGrHist 115) = fr. 69 (FHG I, 288) = Apollon. Hist. mir. 1; Epimenides 3 A 8 D.-K. = Paus. I 14, 4.

[117] D. L. ibid. κατεκοιμήθη. κεκοιμῆσθαι: Apoll. ibid. κατακοιμηθῆναι. ὕπνου. κεκοιμῆσθαι: Paus. ibid. κοιμᾶσθαι. ὕπνος. καθεύδοντι.

[118] Apollon. Hist. mir. 2; Bethe, E., RE II s. v. Aristeas, 877.

[119] Bolton, op. cit. 120.

[120] Suda s. v. 'Αριστέας; Max. Tyr. X 2 f.

[121] Rohde, Psyche, II 419 f.

[122] Delatte, V. P. 245.

[123] Burkert, W. W. 139, L. S. 159 f.

[124] Wehrli, F., Die Schule des Aristoteles, Suppl. -Bd I: Hermippos der Kallimacheer, Basel, 1974, 56 f.

[125] Rohde, E., Kleine Schriften II, Tübingen und Leipzig, 1901, (= "Die Quellen des Jamblichus in seiner Biographie des Pythagoras," Rhein. Mus. XXVI, 1871, 554 ff.; XXVII, 1872, 23 ff.) (= Quellen) 106 n. 1; Rohde, Psyche, II 419 f.

[126] Porphyr. vit. Pyth. 56-57.

[127] Eudemus fr. 88 Wehrli = Simplicius In Aristotelis Phys. IV 12.

[128] Rohde, Quellen, 126, 132; Delatte, A., Études sur la littérature pythagoricienne, Paris, 1915, (= Études) 98, n. 1, 266, V. P. 115 n. 6, 116 n. 2-4, 142 n. 8-9; Casel, O., De Philosophorum Graecorum Silentio Mystico, Gissae 1919, 34; Burnet op. cit. 92; Lévy, op. cit. 50, n. 2; Minar, E. L., Early Pythagorean Politics in Practice and Theory, Baltimore 1942, 124; D. - K. 14 Pythagoras 8a; Burkert, W. W. 99 f., L. S. 122 f.; Guthrie, H. G. P. I, 151; 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』東京, 1987, 85; Huffman, op. cit. 70.

[129] Porphyr. vit. Pyth. 18はDicaearchusからの引用とするが，19節はこれに入れないのは，WehrliとMüllerである．Dicaearchus fr. 33 Wehrli = fr. 29 (FHG II, 244). しかしいずれもその根拠は述べていない．

[130] Rohde, E., Der Griechische Roman und seine Vorläufer, Leipzig, 1900, 272-76; Porphyre, Vie de Pythagore. Lettre a Marcella, texte établi et traduit par Édouard des Places, Paris, 1982, 16 f ならびに各頁のapparatus.

[131] Rohde, Quellen, 132; Guthrie, H. G. P. I, 151; Burkert, W. W. 99 f., L. S. 122 f.; Huffman, op. cit. 70.

[132] RohdeはIambl. de vita Pythag. 2に関しては出典考察の対象にしていない．この箇所と，Iam. Prot. 1, 21の三カ所は，Pythagoras派の，黙秘をともなうsymbolaによる訓導の，特異な性格を述べている．Iambl. de vita Pythag. 2, ἀπεξενωμένοις καί τισιν ἀπορρήτοις συμβόλοις. Iambl. Prot. 1, ἀλλότρια

καὶ ἀπόρρητα τρόπον. Iambl. Prot. 21, τρόπον ... ἴδιον ... καὶ ἀπόρρητον. 黙秘の意味のἀπόρρητοςとならんで使われているἀπεξενωμένοις. ἀλλότρια. ἴδιονは，いずれも「他の哲学諸派にくらべて，ピュタゴラス派に独特な」の意味である．symbolaの性格について述べる類似の表現から，これら三カ所は，Iamblichus自身の書いたものとみなす．

[133] この箇所の，誇張された言葉の羅列は，後世の新プラトン派の書き方の特徴である．さらに，104節のPythagorasと同時代の弟子の人名録には，明らかな誤りが見られる．たとえばEurytusはPhilolausの弟子であり，Pythagorasと同時代ではない．したがって，これを書いたのは後世の作家，おそらくはIamblichus自身である．

[134] Iambl. de vita Pythag. 223-228は既述の104-105をもとにIamblichus自身が書いたものである．Rohde, Quellen 164.

[135] Burkert (W. W. 99 f., L. S. 122.)はこの箇所として6節以下を指示しているが，Porphyr. vit. Pyth. 6で語られているのは，数学的諸学科，つまり，幾何学，数論，算術，天文学，さらに宗教を誰から学んだかということであり，その内容そのものではない．また数学的諸学科は集会で老若男女を相手に説教する内容でもない．説教にふさわしいのは7節の殺生戒であろう．

[136] Casel, op. cit. 34.

[137] Delatte, Études, ibid. Arist. fr. 192 Rose^3 = pagina 132 Ross = Iambl. de vita Pythag. 31; Aristox. fr. 43 Wehrli = fr. 79 (FHG II, 289) = D. L. VIII 15; Timaeus, Iambl. de vita Pythag. 256. Delatteは最後の箇所をTimaeusの証言とするが，根拠は不明．Müller, Jacobyは採録せず．またその箇所自体もPythagoras派に特有の沈黙を述べたものとは思われない．

[138] 動詞形σιωπάωが教えの黙秘の意味で使われる例が一例ある．Iambl. de vita Pythag. 94 (Nicomachus). ただしこれは学修期の弟子の修行項目の一つとして述べられているので，半ばは無言行の意味になる．71節参照．

σιωπή. ἀπόρρητα二語の他に沈黙を表す言葉としてἐχεμυθίαがある．これは無言行と教えの黙秘の両方の意味で使われている．無言行 Iambl. de vita Pythag. 32, 68, 94, 188, 225. 教えの黙秘 Iambl. de vita Pythag. 104, 194, 226, 246 (ἐχερρημοσύνη).

ほかに教えの口外禁止を意味するが，それに加えて言葉で言い表すことができないという意味をもあわせもつ言葉としてἄρρητοςがある．Iambl. de vita Pythag. 252; Iam. De communi mathematica scientia liber, Festa, p. 63, 4; Porphyr.

vit. Pyth. 57. (Burkert, W. W. 436 f., L. S. 461 f.)さらに無言行の意味でἡσυχάζω が使われることもある．D. L. VIII 10.

[139] Rohde, Quellen, 131 ff.

[140] Justin 20, 4 = Pyth. 14 A 13 D.-K.; Timaeus fr. 78 (FHG I, 211) = fr. 131 (FGrHist 566) = Pyth. 14 A 13 D.-K. = Porph. V. P. 4.

[141] Timaeus fr. 83 (FHG I, 212) = fr. 17 (FGrHist 566) = Diog. Laert. VIII 11.

[142] Jacoby, FGrHist. III b, Kommentar zu Nr. 297-607, Noten, 1955, 326.

[143] Rohdeはこれの根拠となるTimaeusの断片としてfrr. 78, 77 FHGを挙げるが，これはfrr. 79, 77 FHGの間違い，あるいは誤植であろう．Timaeus fr. 79 (FHG I, 211) = fr. 147 (FGrHist 566) = Censorin. De die nat. c. 2; Timaeus fr. 77 (FHG I, 211) = Phot. Lex. c. 129; Timaeus fr. 13 a (FGrHist 566) = Schol. T Plat. Phaidr. 279 C = Scholia Platonica, Greene, 88; Timaeus fr. 13 b (FGrHist 566) = Diog. Laert. VIII 10.

[144] Iamblichusの直接の典拠は，Apolloniusであろう．Pythagoras派にたいする偽文書捏造を記すIambl. de vita Pythag. 259 f.は，Apolloniusが出典である．ここでApolloniusは，すでに知られている諸断片をつなぎ合わせて，捏造文書を再現している．このような著作の仕方は，Iambl. de vita Pythag. 37 ff.での，説教の再現の仕方と同じである．さらに，Iambl. de vita Pythag. 264でPythagoras派一門によって建立されたムーサ神殿に，Apolloniusは言及する．これは，説教箇所Iambl. de vita Pythag. 50でのムーサ神殿建立を受けている．このようなことから，Timaeus作の説教内容に，Apolloniusがさらに手を加え，これがIamblichusに伝わったと推論できる．Rohde, Quellen, 134.

[145] Delatte, V. P. 194 ff.

[146] Delatte, Étude, 9, 13, 23, 36.

[147] Aristoxenus fr. 17 Wehrli = Porphyr. vit. Pyth. 22, ならびにこれの並行記事Iambl. de vita Pythag. 241.

[148] Dicaearchus fr. 25 Wehrli = Cicero Epist. ad Atticum II 16, 3.

[149] Dicaearch. fr. 30 Wehrli = D. L. I 40.

[150] Dicaearch. fr. 29 Wehrli = Plutarch. An seni gerenda res publica XXVI 796c; Dicaearch. fr. 31 Wehrli = Codex Vaticanus 435.

[151] Martini, E., RE V s. v. Dikaiarchos, 553, 562.

[152] Rohde, Quellen, 110; Martini, op. cit. 553.

[153] Dicaearch. fr. 5 Wehrli = Plutarch. dv. Colot. XIV 1115 A; Dicaearch. fr. 70 Wehrli = Cicero Epist. ad Atticum XIII 32; Martini, op. cit. 556.

[154] Dicaearch. fr. 7 Wehrli = Cicero Tusc. I 10, 21; Dicaearch. fr. 8 c Wehrli = Cicero Tusc. I 11, 24; Dicaearch. fr. 8 d Wehrli = Cicero Tusc. I 18, 41; Dicaearch. fr. 8 e Wehrli = Cicero Tusc. I 22, 51; Dicaearch. fr. 8 f Wehrli = Cicero Acad.prior. II 39, 124; Dicaearch. fr. 9 Wehrli = Cicero Tusc. I 31, 77. その他の証言，Dicaearch. frr. 5 - 12 Wehrli.

[155] Martini, op. cit. 562.

[156] Porphyr. vit. Pyth. 18でのPythagoras賞賛にもかかわらず，Dicaearchusは七賢人のリストからPythagorasの名を除外する(Dicaearch. fr. 32 Wehrli = D. L. I 41). これはPythagorasのθεωρός (Iam. Prot. p. 51, 9) 的な面に賛同できなかったからではないかと推測できる．Pythagorasの最後を叙するにあたっても，Aristoxenusが事実を糊塗して言いつくろうのにたいし(Aristox. fr. 18 Wehrli = Iambl. de vita Pythag. 248 ff.)，DicaearchusはPythagorasの無様な死に方をそのまま描く(Dicaearch. frr. 34, 35a, b Wehrli = Porphyr. vit. Pyth. 56, 57, D. L. VIII 40).

[157] Dicaearch. frr. 5 - 12 Wehrli.

[158] Dicaearch. fr. 36 Wehrli = Clearchus fr. 10 Wehrli = Gellius N. A. IV 11, 14. 断片では，この転生譚を伝える主語がClearchus et Dicaearchusとなっているが，実質的にはDicaearchusがつくったものである．Rohde, Psyche II 418.